

興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報IX

2024

興福寺



鐘樓全景（625次、北西から）



東金堂院南面築地堀全景（640次南区、東から）



東金堂院北面回廊全景（649次、北から）

序

興福寺では奈良文化財研究所のご協力を得て、第1期興福寺境内整備事業を平成10年度から進めている。発掘調査では数々の学術的成果が得られ、より鮮明な興福寺の姿を描くことができるようになった。お陰で300年来の悲願であった中金堂の創建当時の規模での再建を平成30年に果たすことができ、また、南大門・北円堂・経蔵・鐘楼・西室・中室・東金堂院などの伽藍配置を顕在化することができた。深く感謝申し上げる次第である。

令和3年度に史跡興福寺境内保存活用計画の策定が行われ、整備事業も新たな局面を迎えた。令和4年度は保存活用計画を承け、第2期興福寺境内整備事業の策定に着手し、併せて第2期整備事業を開始することとなった。

また、明治時代に小修理した国宝・五重塔の120年ぶりの修理が始まった。建造物群は世界遺産に認定されている。史跡・文化財は国の宝であり国民の財産である。世界遺産は人類の財産で宝でもある。

周辺と調和し、より充実した興福寺境内であるために、奈良文化財研究所の各位に一層のお力添えをお願いする次第である。

令和6年3月

興福寺貫首 森 谷 英 俊

目 次

序

目 次

1	調査経過	1
2	鐘楼と東金堂院の歴史	3
	（1）鐘楼の歴史と既往の調査	3
	（2）東金堂院の歴史と既往の調査	3
3	遺 構	5
	（1）調査前の地形と基本層序	5
	（2）鐘楼の遺構	7
	（3）東金堂院の遺構	11
4	出土遺物	28
5	結 語	30
	（1）鐘楼の調査成果と課題	30
	（2）東金堂院の調査成果と課題	31
	報告書抄録	

例 言

1. 本書は、興福寺第1期境内整備事業にともなう2020年度から2022年度の発掘調査概要報告書である。ただし、2020年度・2021年度発掘調査の概要は、すでに『奈良文化財研究所紀要2021』（以下『紀要2021』）、『奈良文化財研究所紀要2022』（以下、『紀要2022』）にて報告しているので、詳細はそちらを参照されたい。
2. 調査は、興福寺の委託を受けた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部（平城地区）が、2020年7月1日から10月15日、2021年7月13日から11月4日、2022年7月6日から11月17日に実施した。
3. 調査は、和田一之輔・神野恵・森先一貴〔現東京大学〕・山本祥隆・山崎有生（2020年度）、浦蓉子・谷澤重里・和田一之輔・小田裕樹・神野恵・田中龍一・馬場基・垣中健志・目黒新悟・西田紀子（2021年度）、和田一之輔・垣中健志・目黒新悟（2022年度）が担当した。
石材の鑑定には、脇谷草一郎・柳田明進・中田愛乃〔現大阪大学〕があたった。
4. 調査にあたっては、文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の協力を得た。
5. 本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第625次（2020年度）、640次（2021年度）、649次（2022年度）調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準にしたがい一連の番号を付した。発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第VI系）による。
6. 本書の作成は、当調査部副部長・今井晃樹の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議を経ておこなった。編集・執筆は垣中が担当し、遺物の項は神野と今井が執筆を分担した。執筆者は執筆箇所の末尾に示す。
7. 遺構の写真は、中村一郎・飯田ゆりあ・鎌倉綾・杉本和樹が撮影した。

1 調査経過

興福寺では「興福寺境内整備構想」(1998年)にもとづき、寺観の復元・整備が進められている。奈良文化財研究所(以下、奈文研)では1998年以来、整備に必要な情報を得るための発掘調査(中金堂院、南大門、北円堂院、西室、中室、経蔵、鐘楼)を継続しておこなってきた。今回もその一環として、鐘楼および東金堂院において、2020年度から2022年度の3カ年にわたって発掘調査をおこなった(第1表)。

調査区は鐘楼と東金堂院に計6カ所設定した(第1図)。鐘楼では2015年度に鐘楼基壇の一部を発掘調査したが(『興福寺第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ』2015年、以下『概報Ⅷ』)、鐘楼の規模と構造の解明を目的として、2020年度には559次D区とE区を含む基壇全面の345㎡を調査した。調査は7月1日より開始し、10月7日に終了した。

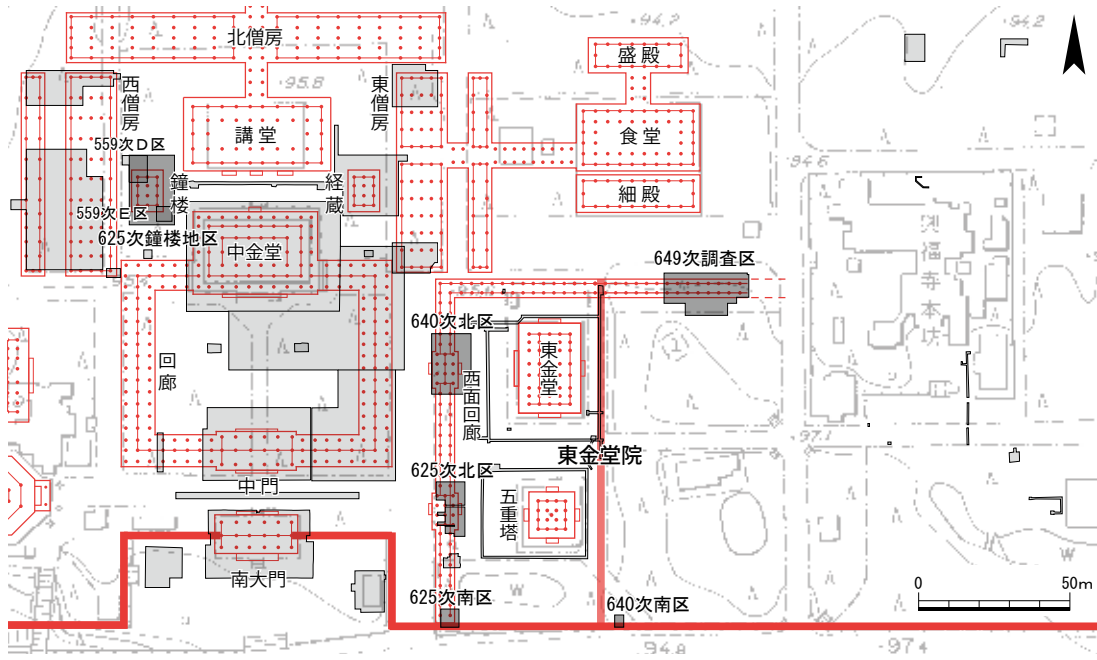
東金堂院の調査では、2020・2021年度に2つずつ、2022年度に1つの調査区を設定した。2020年度は、五重塔の西正面に開く門とそれに接続する西面回廊を含む625次北区136㎡、南面を区画する築地塀の構造をあきらかにするための625次南区33㎡を設定した。調査面積の合計は169㎡である。調査は7月2日より開始し、10月15日に終了した。

2021年度には、東金堂の西正面に開く門とそれに取り付く西面回廊の規模と構造をあきらかにすることを目的とする640次北区260㎡、五重塔の南東で南面築地塀の解明を目的とする640次南区12㎡を設定した。調査面積の合計は272㎡である。調査は2021年7月13日に開始し、11月4日に終了した。

2022年度の649次調査は、北面回廊の規模と構造をあきらかにし、東金堂院の規模を把握することを目的として、東金堂の北東約43mの位置に335㎡の調査区を設定した。このうち、12㎡が既調査区(『興福寺防災施設工事・発掘報告書』1978年、以下『防災報告』)と重複している。調査は7月6日より開始し、11月17日に終了した。

第1表 調査経過

2020年度(625次)	2021年度(640次)	2022年度(649次)
6月26日 鐘楼縄張り	6月9日 現地協議、北区縄張り	6月23日 現地協議、地中レーダー探査
6月29日 北区、南区縄張り	7月13日 北区重機掘削開始(～8月6日)	6月28日 縄張り
7月1日 鐘楼重機掘削開始(～7月27日)	7月14日 北区手掘り調査開始	6月29日 調査区内フェンス基礎抜き立会
北区、南区手掘り調査開始	7月29日 南区縄張り	7月6日 重機掘削開始(～7月13日)
7月2日 鐘楼手掘り調査開始	8月24日 北区写真撮影	7月7日 手掘り調査開始
7月8日 北区、南区重機掘削開始(～7月29日)	9月16日 北区写真撮影	8月17日 拡張区重機掘削開始(～9月5日)
7月28日 鐘楼写真撮影	9月21日 北区写真撮影	8月24日 境内整備委員会視察
8月20日 鐘楼炭化材サンプル採取	9月29日 北区現場検討会	9月27日 写真撮影(ハイライダー)
8月26日 南区拡張区重機掘削開始(～8月27日)	10月4日 南区重機掘削	10月3日 現場検討会
9月4日 南区写真撮影	南区手掘り調査開始	10月6日 石材鑑定
9月9日 現場検討会、北区写真撮影	10月6日 記者発表	10月13日 記者発表
9月10日 全区写真撮影(ハイライダー)	10月8日 南区写真撮影	10月15日 現地見学会(来場者1,120名)
9月16日 鐘楼写真撮影	10月9日 現地見学会(来場者949名)	10月20日 写真撮影
9月18日 石材鑑定	10月12日 南区写真撮影	10月24日 砂撒き開始(～11月4日)
9月25日 記者発表	10月13日 南区写真撮影	10月25日 写真撮影
9月28日 現地見学会(来場者606名)	10月15日 北区写真撮影(ハイライダー)	10月27日 写真撮影
9月29日 鐘楼写真撮影	10月19日 南区写真撮影	土壌サンプル採取(～11月2日)
鐘楼土壌サンプル採取(～9月30日)	10月20日 石材鑑定	11月2日 写真撮影
10月1日 南区写真撮影	10月22日 南区写真撮影	11月17日 埋め戻し完了、調査終了
10月2日 鐘楼砂撒き完了	10月27日 「花の松」の石碑基壇の解体立会	
北区土壌サンプル採取(～10月7日)	北区砂撒き開始(～11月2日)	
10月7日 南区写真撮影	10月28日 北区写真撮影	
10月15日 全区埋め戻し、砂撒き完了、調査終了	10月29日 北区写真撮影	
	南区砂撒き	
	11月1日 南区埋め戻し完了	
	11月4日 北区埋め戻し完了、調査終了	



第1図 調査区位置図 1:2500

第2表 興福寺鐘樓・東金堂・五重塔略年表

和 暦	西 暦	鐘 楼	東金堂	五重塔	備 考	典 拠
	720 頃	創建				『興福寺流記』
神亀 3	726		創建			『興福寺流記』
天平 2	730			創建		『興福寺流記』
元慶 2	878	焼失				『日本三代実録』
元慶 5	881	再建			鐘楼を造る料を充てる	『日本三代実録』
寛仁 元	1017		焼失	焼失		『御堂閤白記』『日本紀略』『扶桑略記』ほか
長元 4	1031		再建	再建		『興福寺流記』『日本紀略』『小右記』
永承 元	1046	焼失	焼失	焼失カ		『興福寺流記』『造興福寺記』『扶桑略記』ほか
永承 3	1048	再建	再建		諸堂供養、東金堂手斧始	『造興福寺記』『扶桑略記』
康平 3	1060	焼失	焼失カ	焼失カ		『康平記』『扶桑略記』『三会定一記』
治暦 3	1067	再建	再建カ		東金堂供養	『扶桑略記』『興福寺流記』
承暦 2	1078			再建		『水左記』『三会定一記』
永長 元	1096	焼失				『中右記』『後二条師通記』ほか
康和 5	1103	再建				『中右記』
治承 4	1180	焼失	焼失	焼失		『玉葉』『三会定一記』
養和 元	1181	再建				『養和元年記』ほか
寿永 元	1182		再建			『中臣祐重記』
	1200 以降	再建				『春日大社文書』16
建仁 元	1201			再建カ		『春日神社文書』所収「源通親書状礼紙」
元久 3	1206			再建	回廊も竣工	『三長記』
建治 3	1277	焼失				『興福寺略年代記』ほか
弘安 8	1285	再建				『三会定一記』
嘉暦 2	1327	焼失				『大乘院日記目録』ほか
文和 5	1356		焼失	焼失		『嘉元記』『細々要記抜書』『法隆寺別当次第』『園太暦』
応安 3	1370		再建			『細々要記抜書』
嘉慶 2	1388			再建カ		『細々要記抜書』
応永 5	1398	(再建年不明)			鐘楼・経蔵は造立	『寺門事条々開書』
応永 18	1411		焼失	焼失		『東寺執行日記』『大乘院日記目録』『興福寺炎上再建記』『興福寺別当次第』
応永 22	1415		再建			『古記部類』『興福寺東金堂記』『興福寺炎上再建記』
応永 33	1426			再建		『古記部類』
享保 2	1717	焼失				『南都年代記』

参考文献 太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、1979。
 藪中五百樹「奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦」『南都仏教』64、1990。
 藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194、1991。
 藪中五百樹「鎌倉時代に於ける興福寺の造営と瓦(上)」『仏教芸術』257、2001。
 藪中五百樹「南北朝・室町時代に於ける興福寺の造営と瓦」『立命館大学考古学論集Ⅱ』2001。
 藪中五百樹「安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦」『帝塚山大学考古学研究報告』VI、2005。

2 鐘楼と東金堂院の歴史

(1) 鐘楼の歴史と既往の調査

鐘楼の概要 興福寺では中金堂と講堂の東に経蔵、西に鐘楼が位置する。奈良時代の興福寺境内の様子を伝える、平安時代末頃に成立した『興福寺流記』（以下、『流記』）に引用されている「宝字記」に鐘楼に関する記述がみえることから、天平宝字年間（757～765）には完成していたと考えられる。さらに、『流記』の別の箇所では、鐘楼ほかの建物について「本願之御時、所造立也」と記されている。これによるなら、鐘楼は「本願」（藤原不比等）が死去した養老4年（720）以前、遅くともそれからあまり下らない時期に建造されたこととなる。建立以後8度ほど火災に遭い（第2表）、最後の焼失は享保2年（1717）のことで、それ以降は再建されることなく現在にいたる。

既往の調査と復元 1975年の水道管理設工事にともなう調査で、中金堂・講堂と鐘楼との間で人頭大の石による石敷きを検出している（『防災報告』）。2015年に実施した平城第559次調査では、鐘楼の規模の確認を主な目的とし、鐘楼西北部に60㎡、東南部に25㎡の調査区を設定した。創建当初の規模を明確には確認できなかったが、少なくとも室町時代の再建以降は、経蔵と同規模であったと推定した（『概報Ⅶ』）。

鐘楼の復元は、これまで『流記』の記述と地表に露出している礎石の位置をもとにおこなわれてきた。大岡實が復元案を提示しており（『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966年）、鐘楼は桁行3間で総長3丈4尺、柱間寸法は中央間が12尺で両脇間は11尺、梁行は2間で総長2丈2尺、柱間寸法は11尺等間とする。また、享保2年（1717）に伽藍中心部が火災に遭う前後に描かれた指図類である『興福寺建築諸図』（東京国立博物館所蔵）と発掘調査の成果より、鐘楼の柱配置について検討を加えた。その結果、『興福寺建築諸図』は、絵図が描かれた当時現存していた室町時代の基壇や礎石をもとに描かれた絵図と判断でき、現存する礎石は近世に焼失した鼓楼・鐘楼が建てられた室町時代以降、現在まで位置を変えていないと考えられている（『概報Ⅷ』）。

(2) 東金堂院の歴史と既往の調査

東金堂院の概要 東金堂と五重塔を中心とする東金堂院は中金堂院の東南に位置する区画で、『流記』では「東仏殿院」と称される。『流記』によると、東金堂は神亀3年（726）に聖武天皇が元正太上天皇の病氣平癒を願って建立、五重塔は天平2年（730）に光明皇后の発願により創建し、皇后は自ら簀を持ち、土を運んだという。回廊については『流記』所引「天平前記」に、「一。廡廊。〈天平前記云。廊一條。〈西方。長廿七間。／延曆記同之。〉／北方。長卅八間。／西門二門。〈各高一丈二尺七寸。／長三間。々別一丈。〉廣一丈六尺。／北小門二間〈云々。〉」と記載があることから、東金堂院の門・回廊・築地塀も同時期に建てられたとみられる。建立以後、東金堂と五重塔は5回の火災に遭った。治承4年（1180）の南都焼討での焼失後は、寿永元年（1182）に東金堂を再建し（『中臣祐重記』）、元久3年（1206）までに五重塔と回廊が再建された（『三長記』）。現存する東金堂は応永22年（1415）、五重塔は応永33年（1426）に再建されたものである（第2表）。なお、東金堂院の区画施設は現存せず、詳しい廃絶の時期や再建の回数などはあきらかでない。

既往の調査と復元 東金堂院の既往の調査には、防災施設工事にともない実施された1975～1976年の発掘調査がある（『防災報告』）。この調査では、五重塔の西側で西面回廊および門の凝灰岩製基壇

外装や塔に向かって延びる東西方向の石敷等を検出した。北面回廊でも同じく凝灰岩製の基壇外装や原位置を保つ礎石、石敷等を確認している。この調査の結果、北面回廊は礎石建ちの単廊で、柱間寸法は桁行約 3.4 m (11.5 尺)、梁行約 3.6 m (12 尺)、基壇の幅は約 6.4 m (21.5 尺) と判明した。また、北面回廊の東端と考えられていた地点より東でも礎石を検出したことから、ある時期に北面回廊を東に向かって延長した可能性が指摘された。これも礎石建ちの単廊であるが、柱間寸法が不揃いであるなど、課題も残された。

大岡實は『流記』や「春日社寺曼荼羅」といった史資料にくわえて、地上に露出している北面回廊の礎石位置をもとに、東金堂院回廊の復元案を提示した(大岡實「興福寺建築論(上)」『建築雑誌』505、1928年)。西面と北面が礎石建ちの単廊、南面が寺城南限の区画を兼ねた築地塀、東面が自然地形の丘もしくは築地塀とし、東金堂と五重塔の西正面には門が開いていたとみる。また、大岡は東金堂院西面回廊について、『流記』にもとづき回廊 27 間に桁行 3 間(10 尺等間)の門を 2 つくわえて計 33 間とし、また 2 つの門はそれぞれ東金堂・五重塔の西側に両者と中軸を揃えるかたちで設置されたと想定する。さらに、東金堂の北側に遺存する礎石の配置から北面回廊の柱間寸法を桁行 11.5 尺、梁行 12 尺と推定し、これを西面回廊にも適用した。その結果、大岡案での西面回廊の総長は 371 尺となる。鎌倉時代(14 世紀)の絵図である「春日社寺曼荼羅」(奈良国立博物館蔵)には、東金堂と五重塔の西面に回廊がめぐり、東金堂と五重塔それぞれの西正面に門が描かれていることから、創建期の東金堂院伽藍の回廊と門も同様であった可能性が考えられてきた。

大岡の復元案によると、創建時の東金堂院の規模は南北約 110 m、東西約 51 m と南北に長い区画で、東金堂と五重塔を中心とする区画であると考えられてきた。しかし、『流記』の本文を詳細に校訂した谷本啓によって、北面回廊の総長が 38 間と明記されていることが指摘された(谷本啓『興福寺流記』の基礎的研究(付「校訂『興福寺流記』」『鳳翔学叢』3、2007年)。また、『流記』の東金堂院の箇所には、東金堂と五重塔に関する記述の後に、「檜皮葺雙堂」とその「副殿」、および「檜皮葺掃守殿」といった堂舎についての記述があり、その後に回廊と門に関する記述がある。東金堂が桁行 8 丈(約 24m)、梁行 4 丈 4 尺(約 13m)であるのに対し、「檜皮葺雙堂」が桁行 6 丈 8 尺(約 20m)、梁行 3 丈(約 9m)、その「副殿」が梁行 1 丈 4 尺 1 寸(約 4m)、「檜皮葺掃守殿」が桁行 5 尺(5 丈(約 15m)の誤記カ)、梁行 2 丈(約 6m)と相応の規模を有する建物である。仮に大岡の復元案に従うと、東金堂院は南北に長い敷地に、東金堂と五重塔のみでほぼ敷地が占められてしまい、これらの堂舎が立地する余地がほとんどないことから、北面回廊を 38 間として東金堂と五重塔の裏手(東側)に広大な敷地をとった、南北約 110 m、東西約 130 m と東西に長い区画を創建期の東金堂院の区画と想定する見解が出されている(山本祥隆・山崎有生「興福寺創建東金堂院の再検討」『奈文研論叢』3、2022年)。また、興福寺の境内を描いた中世以降の絵図類のうち「興福寺堂舎図」、「興福寺伽藍四町方面畧図」(ともに大宮家文書)には、東金堂院に東金堂と五重塔の他にも、東金堂にとりつく回廊のような建物や、五重塔の南側に神社、さらに背面には「興福寺伽藍四町方面畧図」では「地藏堂」とされる建物などが描かれており、中世以降も大岡の復元案よりも東西に広い空間が東金堂院の敷地であったと考えられる。

以上のことから、奈良時代の創建当初の東金堂院の復元を進めるうえで、東金堂院の規模と構造をあきらかにする必要があった。『流記』に記載されている北面回廊と西面回廊、さらに北面回廊にある「北小門」と西面回廊にある 2 つの「西門」について正確に把握することが課題となっていた。

3 遺 構

(1) 調査前の地形と基本層序

鐘 楼 調査前の鐘楼には低い土壇が残っており、地表に9基の礎石の上面が露出していた。また興福寺では造営にともなって寺域を大規模に造成したことが、これまでの発掘調査で確認されている。鐘楼の西に位置する西室や北円堂院の発掘調査では、基盤となる層が黄褐色から赤褐色の礫層とされ、中金堂院や南大門の調査でも同様の層が確認されている。南大門では基壇の断割調査で、一連の基盤層が北西から南東に向けて落ち込むことを確認している。中門から中金堂院東面回廊にかけても同様の谷地形があることから、寺の造営に先立って南北方向の谷筋を埋め立てて整地をおこない、平坦面を造成したことがわかる。また、同様の層は北円堂西側でも西に向けて落ち込み、その上に暗褐色粘土・黄褐色粘質土や砂質土で版築をとまなう入念な整地がほどこされている（『概報V』2010年、『概報VI』2012年、『概報VII』2016年）。

鐘楼地区の基本層序は、基壇上においては上から、①表土が10cm以下、②近代以降の盛土が10～40cmの厚さで堆積しており、その直下で礫を多く含む黄褐色粘質土・砂質土からなる基壇土を検出した。基壇土上面の標高は、場所により削平を受けているため95.7～96.1mと幅がある。

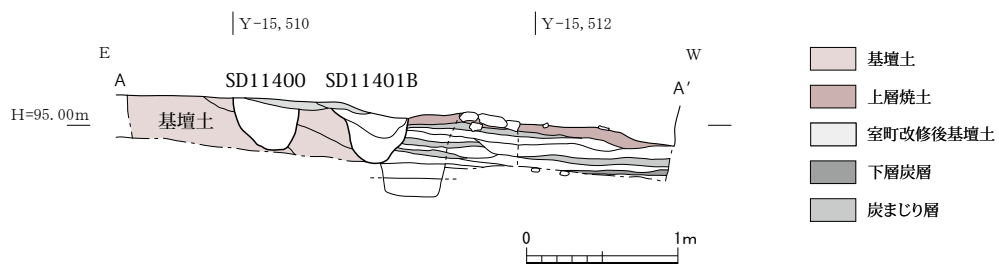
基壇周囲では上から、①整備盛土が約20cm、②近世以降の遺物包含層もしくは近代以降の盛土が10～30cm、③古代から中世の遺物包含層が20～30cm、最下部に④創建当初とみられる整地土が約10cmの厚さで堆積する（第2図）。③遺物包含層はさらに細かく区別でき、褐色砂質の整地土と炭を多く含む層が交互に堆積する状況が認められる。なお、基壇西側を中心に③の上面を厚さ4cm未満の赤色焼土塊（『概報VIII』の「上層焼土」）を多く含む層と炭化材層が覆う。また、④の整地土の上面には基壇北東を中心に最大厚5cmほどの炭層が堆積する（『概報VIII』の「下層焼土」。炭化物主体の堆積物であり以下では「下層炭層」と呼ぶ）。

創建当初の整地の下位には、粘土塊を含む橙褐色砂礫層が70cm以上厚く堆積する。この層は周辺の発掘調査で確認していた黄褐色から赤褐色の礫層と同じものの可能性が高い。粘土塊、シルト、砂、礫を混合した層であり、人為的な整地層の可能性が高いため、以下、これを基盤整地土と呼ぶ。

標高は上層焼土上面で95.5m、下層炭層上面で95.2～95.3m、基盤整地土上面は基壇中央部で95.3m、基壇周囲では95.2m前後で基壇中央部分がわずかに高い。

なお、西南区画全体および東南区画の559次E区を除く範囲については、遺構保護の観点から上層焼土および相当層上面までの調査とした。

東金堂院 西面回廊推定地の東金堂と五重塔の正面付近では、門や回廊の礎石、基壇の高まりは残っ



第2図 鐘楼基壇西縁(559次D区南壁)断面図 1:50

ておらず、現在は砂利敷舗装のほぼ平らな空間が広がる。南面は現在の興福寺の南限を兼ねており、石垣の上に板塀が設置されている。築地塀の礎石や基壇の高まりは目視で確認できない。東金堂北の北面回廊推定地では、回廊の礎石が、北側柱筋で2基、南側柱筋で4基が地上に露出している。これらの礎石のさらに東側の649次調査区周辺は、北へ向かって低くなる斜面地となっており、多量の瓦を廃棄してできた高まりの北裾にあたる。

五重塔正面の625次北区の基本層序と遺構検出面は、現在の砂利敷舗装を除去した、標高約95.0m(地表下約10cm)である。調査区北端では砂利敷が15cm程度と分厚く、その下の褐色土を除去した、標高約95.1m(地表下約20cm)で遺構を検出した。遺構検出面は、門および回廊部分では赤橙褐色土上面、調査区東端では炭まじりの黄褐色土上面となる。

東金堂院の西南隅にあたる625次南区では、表土および近現代の包含層を除去した、標高約95.4m(地表下5～10cm)で近世・近代の遺構を検出した。調査区南端の南面築地塀もこの標高での確認となる。調査区北半では、それらの下に厚さ60cm程度の近世の遺物包含層がある。これを除去した、標高94.4～94.6m(地表下60～80cm)が古代の遺構検出面である。

東金堂正面の640次北区では、調査区中央の西面北門と西面回廊の基壇上では、上から小砂利混じり灰黄色土(5cm、現在の舗装)、明褐色砂質土(15cm、近代の盛土)、礫混じり褐色砂質土(3cm、近世～近代の舗装)があり、その直下で明黄褐色粘質土の基壇土を検出した。基壇の東西では、礫混じり褐色砂質土まで基壇上と同様の堆積状況を示し、その下では上から灰褐色砂質土(5cm、近世～近代の盛土)、小礫混じり暗赤褐色砂質土(3cm、中世～近世の舗装)、褐色砂質土(10cm、整地土)があり、その直下で礫混じり明褐色砂質土の基盤整地土(70cm以上)を検出した。遺構検出は基壇上面では標高約95.1mで、基壇の東西では整地土上面の標高約95.2mと基盤整地土上面の標高約95.1mでおこなった。

また、西面北門中心の基壇土直下では標高約94.8m、調査区東南隅では標高約94.4mで部分的に明褐色粘質土の地山を確認した。調査区の西辺に沿って後世に石列が築かれているが、この裏込土の直下では、調査区の南から約4mの標高約94.7mで、地山と基盤整地土の境を確認した。調査区東北隅では標高約94.2m、調査区中央の東西畦南辺の東側2ヵ所では標高94.3～94.5mまで掘削しても基盤整地土が堆積しており、地山を確認できなかった。

東金堂院の南面にあたる640次南区の南半では、表土(約10cm)および近・現代の包含層(30～40cm)を除去した標高約96.1mで、浅黄色砂質土からなる築地塀の壁体と基部を検出した。その下層には創建当初の基盤整地土とみられる黄橙色砂質土(厚さ30cm以上、標高約95.5m)が広がる。

調査区の北半では、表土(約40cm)、にぶい黄褐色砂質土(25～35cm、近世以降の遺物包含層)、にぶい黄橙色砂質土(10～20cm、瓦を多く含む)の下層に、古代から中世の遺物包含層が堆積する。この層は上から灰黄褐色砂質土(15～25cm)、炭片を多く含む黒褐色砂質土(約5cm)に分層でき、銅製品や瓦片が多く出土した。その下層に広がる黄橙色砂質土(標高約95.3m)は、築地塀下層で確認した創建当初の基盤整地土と一連の層で、この上面で遺構検出をおこなった。

東金堂の北側、649次調査区の基本層序は以下のとおりである。回廊基壇上は地表面から表土と近現代の整備盛土(15～40cm)、灰色砂質土(40～55cm、以下、遺物包含層)、褐灰色砂質土(5cm、以下、回廊基壇積み足し土)と続き、黄橙色粘質土(以下、回廊基壇土)となる。褐灰色砂質土上面で礎石据付穴を検出したので、褐灰色砂質土を回廊基壇積み足し土と判断した。遺構検出は、回廊基壇積み足し

土上面（標高約 95.5 m）と回廊基壇土上面（標高約 95.5 m）でおこなった。基壇上の遺物包含層は、瓦と土器を多量に含み、部分的に焼土・炭化物を含む範囲がある。

回廊の北側では、地表面から表土と近現代の整備盛土（40cm）、灰色砂質土（45cm、遺物包含層）、黄褐色粘質土（20cm、基盤整地土）、にぶい黄橙色砂質土（30cm、基盤整地土）、凝灰岩片が混じる明黄色砂質土（10cm、基盤整地土）と続き、礫混灰褐色砂（30cm 以上、地山、標高 94.2m）となる。遺構検出は、基盤整地土の黄褐色粘質土上面（標高約 94.6 m）でおこなった。なお、調査区東北隅では基盤整地土である黄褐色粘質土が 1 m 以上、少なくとも標高約 93.6 m まで続く。回廊の南側は地表面から表土（5 cm）、灰茶色砂質土（75～90cm）、焼土や炭が混じる黄褐色砂質土（20cm）、褐灰色砂質土（10～20cm、遺物包含層）と続き、礫混じりの黄橙色粘質土（基盤整地土）となる。遺構検出は基盤整地土の黄橙色粘質土上面（標高約 95.5m）でおこなった。なお、調査区中央付近では礫混じりの黄橙色粘質土を標高約 95.8m で検出したことから、本来の回廊南側の整地土の標高は遺構検出面（標高約 95.5m）よりやや高く、回廊南側の整地土が後世に削平された可能性がある。

（2）鐘樓の遺構

礎石建物 SB11010（鐘樓） 桁行 3 間（約 10.1m、34 尺）× 梁行 2 間（約 6.5m、22 尺）の南北棟建物。柱間寸法は、桁行では中央間が 12 尺、両脇間が 11 尺、梁行は 11 尺等間と考えられる（第 5 図）。経蔵とは南北中軸が揃う。残存する 9 基の礎石は三笠安山岩を用いており、長径 1.0～1.9m で柱座などの造り出しは認められない。断割調査をおこなった結果、これらの礎石には据付掘方が認められないため、基壇の構築の過程で設置したと考えられ、また据え直した痕跡もないことから基本的に創建当初の位置を保っているとみられる（第 3・6 図）。基壇外装の改修もほぼ同位置でおこなわれていることと整合的である。

基壇 基壇上面は近世以降にいくつもの攪乱をうけているものの、基壇周縁部の遺構は良好に残存しているためその規模が判明した。基壇規模は南北約 14.5m、東西約 11.1m、基壇の出は各面とも約 2.2m で、経蔵基壇と同規模とみて良い。基壇は、基盤整地土の上に種類の異なる土を積んで構築しているが、版築はおこなわれていない。なお、基壇周囲に雨落溝は認められず、基壇下に掘込地業はおこなわれていない（第 6 図）。

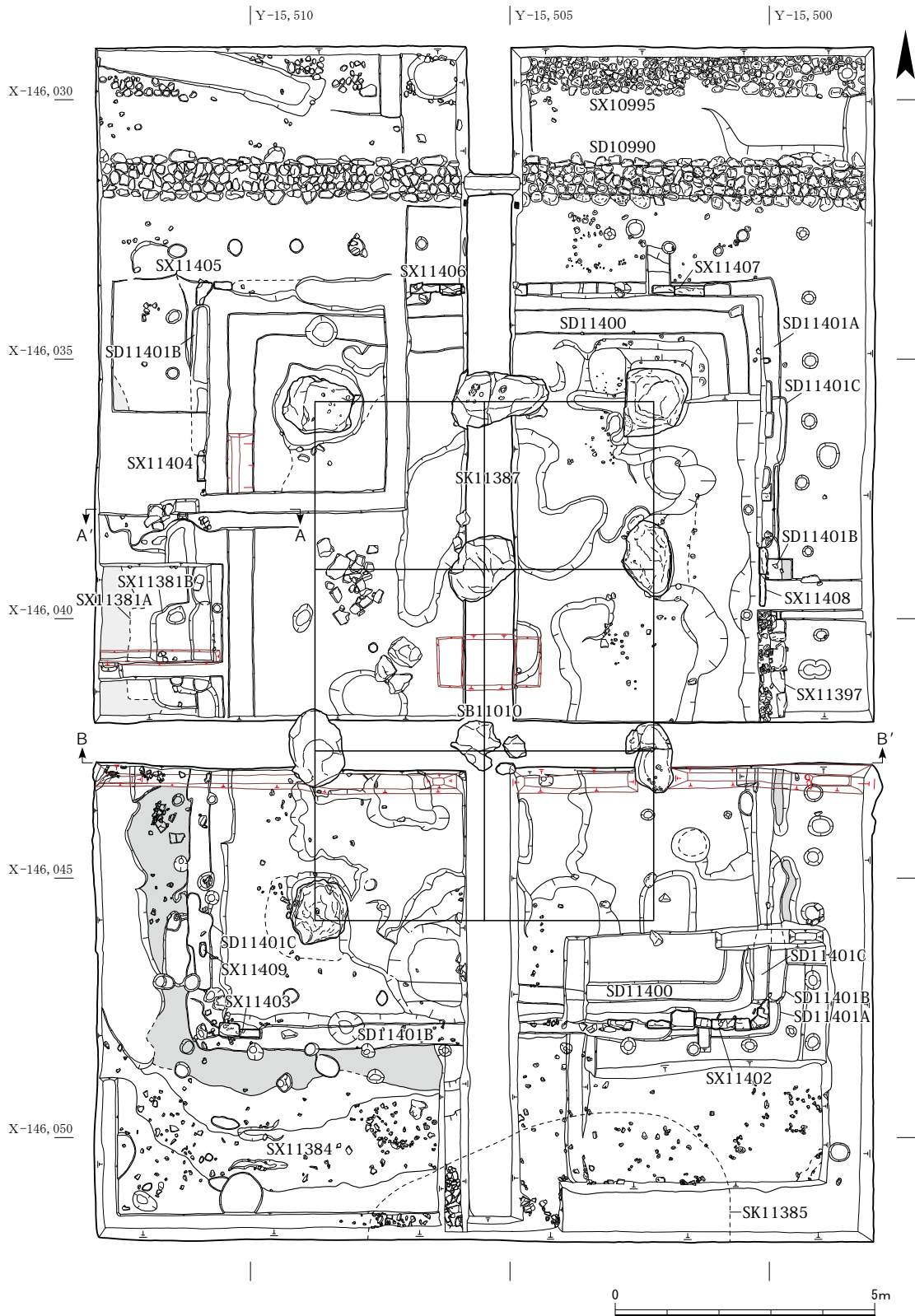
基壇外装 基壇周囲では、享保 2 年（1717）の焼失後も抜き取られずに残置された羽目石が部分的



第 3 図 礎石位置の基壇土（南東から）



第 4 図 羽目石 SX11408（北東から）



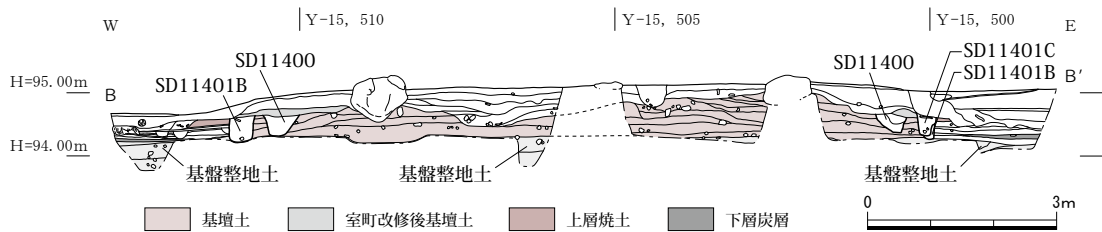
第5図 625次鐘樓遺構平面図 1:120

に残る (SX11402～11409) (第4図)。羽目石の大きさは、幅が30～50cm、厚さ15～20cmである。地覆石およびその抜取痕跡は認められず、羽目石が直接地面に据えられている。羽目石の石材は、大半が奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩であるが、北面東部の羽目石 SX11407 の東側1石と南面西部の羽目石 SX11402 の西から2石目は二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩である。

羽目石が失われている箇所では、掘り込み面を違える3条の素掘溝 SD11401A～C を検出した。羽目石の抜取および据付にともなうものとみられ、掘り込み面および溝の出土遺物、放射性炭素年代(『紀要 2021』) からみて SD11401A が平安時代の抜取・据付溝、SD11401B が室町時代の抜取・据付溝、SD11401C が近世以降の抜取溝と考えられ、度重なる焼失をうけておこなわれた各時期の改修に対応すると考えられる。溝には所々で長方形に溝底が深くなる箇所があり、その平面形が羽目石の大きさに一致する。また、南面東部の SD11401A に据えられた平安時代の羽目石列 SX11402 の底面形状も石材ごとに異なる。これらは、羽目石の上面を揃え、石の底面の高さを石材にあわせて調整していたことを意味する。つまり、少なくとも地覆石が平安時代以降には存在しなかったことを示し、これをさかのぼる痕跡も認められなかった。

なお、基壇西面北部で基盤整地土上面に直接据えられた羽目石 SX11404 の外面には薄い黒線が3条認められた。これは焼失時の痕跡が残されたものと考えられ、周辺の整地層の年代からみて、この羽目石は平安時代以来、残置したものの可能性が高い。通常、興福寺創建期の基壇外装には二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩が用いられるとされる。SX11404 は地獄谷産であることからみて、平安時代に据え直された羽目石との推定と矛盾しない。

袴腰地覆石抜取溝 SD11400 基壇上面で検出した、四周を直線的にめぐる幅40～60cm、深さ約30



第6図 SB11010 基壇東西断面図 1:120



第7図 SD11400 とそれを覆う改修基壇土 (北から)



第8図 西面階段 SX11381A・B (西から)

cmの素掘溝。基壇外側の側壁が急角度に立ち上がるため断面形状は逆直角台形状となる（第6図）。当初、基壇西北部以外では平面検出できなかったが、基壇西縁の断面（第2図）と平面観察の所見から、場所によりこの素掘溝を覆う新しい基壇土が存在することが判明した。

この基壇土は上層焼土を掘り込む室町時代の基壇外装据付溝をも覆うことから、室町時代以降に基壇を整備し直したことがわかる。基壇周囲では複数回に及ぶ焼失を示す炭層や焼土とそのたびの整地層が厚く堆積することから、創建以降、中世にかけて基壇は次第に埋没したと考えられるため、室町時代以降に基壇周囲を大きく改修したものと考えられる（第7図）。

この積み足された改修基壇土を部分的に掘削することによって基壇の西北・東北・東南部で素掘溝の延長を確認した。その規模は溝の外々間距離で南北13.4m、東西10.1mである。一部を掘削したところ遺物は出土しなかったが、細粒化した凝灰岩片がみられた。

延慶2年（1309）の年紀をもつ「春日権現験記絵」（三の丸尚蔵館蔵）や14世紀に描かれたとされる「春日社寺曼荼羅」（奈良国立博物館蔵）等の絵画資料によれば、興福寺鐘楼の下層部分は袴腰と呼ばれる構造物で覆われている。溝の断面形状が逆台形状になること、凝灰岩片が出土するといった状況証拠から、この素掘溝は袴腰の基礎となる地覆石を抜き取った痕跡とみなせる。

西面階段 SX11381 鐘楼基壇の西面で検出した基壇南北の中心軸にある2時期分の階段痕跡（第8図）。SX11381Aは下層炭層SX11412が矩形にとぎれる箇所を階段があった位置とみなすもので、幅が約1.6m、階段の出が約1.2mである。SX11381Bはその後、上層焼土SX11383が形成されるまでの間に構築されたもの。想定位置に段状に残る裏込土とみられる土から存在を推定したもので、幅が約1.8m、階段の出が約0.9m以上である。いずれも耳石の抜取痕跡等は確認できていない。階段も複数回にわたり改修されたことがわかる。

東面階段 SX11397 鐘楼基壇の東面で検出した、幅1.5m以上の階段。階段の出は0.6m以上である。花崗岩の割石を用いており、最下段のみが残る。古代から中世の階段は西側に位置する僧房（西室）に向けて設置されたが、この階段は東側を向いていること、階段の中心が基壇の南北中軸から南にずれていることからみて、僧房廃絶後に設けられた可能性が高い。

東西溝 SD10990 基壇の北方で検出した、幅約50cm、深さ約10cmの東西石組溝。側石・底石に長径10～50cmの玉石を用いる。559次調査での検出分とあわせて長さ約15m分を確認したが、さらに調査区外に延びる。経蔵の北方でも、伽藍中軸に対し、ほぼ対称位置で同様の石組溝がみついている（『概報Ⅶ』）。最下層の整地と同時に敷設されていることから創建期にさかのぼり、講堂周辺の排水溝としての機能をもつものと考えられる。

玉石敷 SX10995 東西溝SD10990の北方で検出した、幅80cm以上の東西方向の玉石敷。長径10～20cmの玉石を敷き詰めており、南側に見切りの石を配置する。北端は確認できておらず北方の未調査区に続く。経蔵の北方でも、伽藍中軸に対しほぼ対称位置で玉石敷を検出しており（『概報Ⅶ』）、主要堂塔を結ぶ通路と考えられる。東西溝SD10990とともに、平安時代以降、鎌倉時代までに埋没した。

瓦溜 SX11384 鐘楼基壇の南西で検出した、幅約1m、長さ約7mの帯状の瓦堆積。上層焼土面上に堆積することから、室町時代の再建の契機となった焼失にともなう落下瓦の可能性がある。

廃棄土坑 SK11385 基壇の南側で検出した、東西7m以上、南北2m以上の瓦を多く含む土坑。平安時代の土師器皿や軒瓦を含むことから、この時代の焼失時の片付けにともなう廃棄土坑であろう。

(3) 東金堂院の遺構

i 625 次北区 (西面南門、西面中回廊)

西面南門 SB11420 調査区中央で礎石据付穴を7基検出した(第10・11図)。一辺60～90cmの隅丸方形で、深さは10cm程度を残すのみ。中央の2基では抜取穴も確認した。門と五重塔の中軸が概ね一致し、その五重塔の推定心のX座標(X-146,149.1)を参考に南北対称に復元すれば、SB11420は桁行3間、梁行2間の礎石建ちの八脚門となる。柱間寸法をみると、梁行は8尺等間となるが、桁行については中央間が約3.2m(11尺)、脇間が約2.6m(9尺)となる。

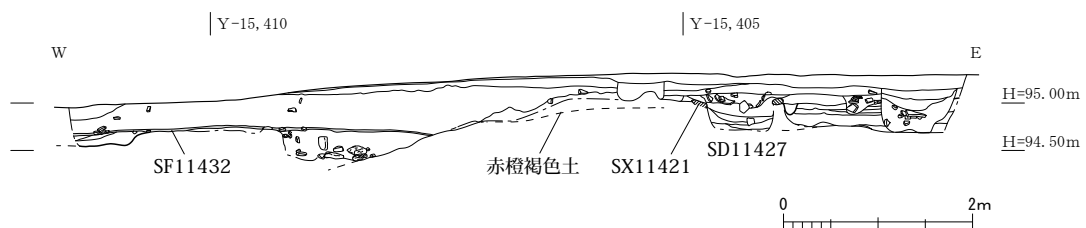
礎石の据付と抜取は1回分のみしか認められない。創建時の礎石をそのまま利用し続けたと考えるのが自然だが、焼損にともなう改築・改修によって創建時の痕跡が失われた可能性も否定できない。事実、門の基壇は相当程度に削平を受けている。

門の基壇 基壇は赤橙褐色土を削り出して造り、凝灰岩製の基壇外装をともなう。基壇の規模は、南北約10.6m、東西約7.7mと推定される。基壇の出は、北面が約1.0m、東面が約1.5m。基壇土は残っておらず、残存する基壇の高さは約15cmである。

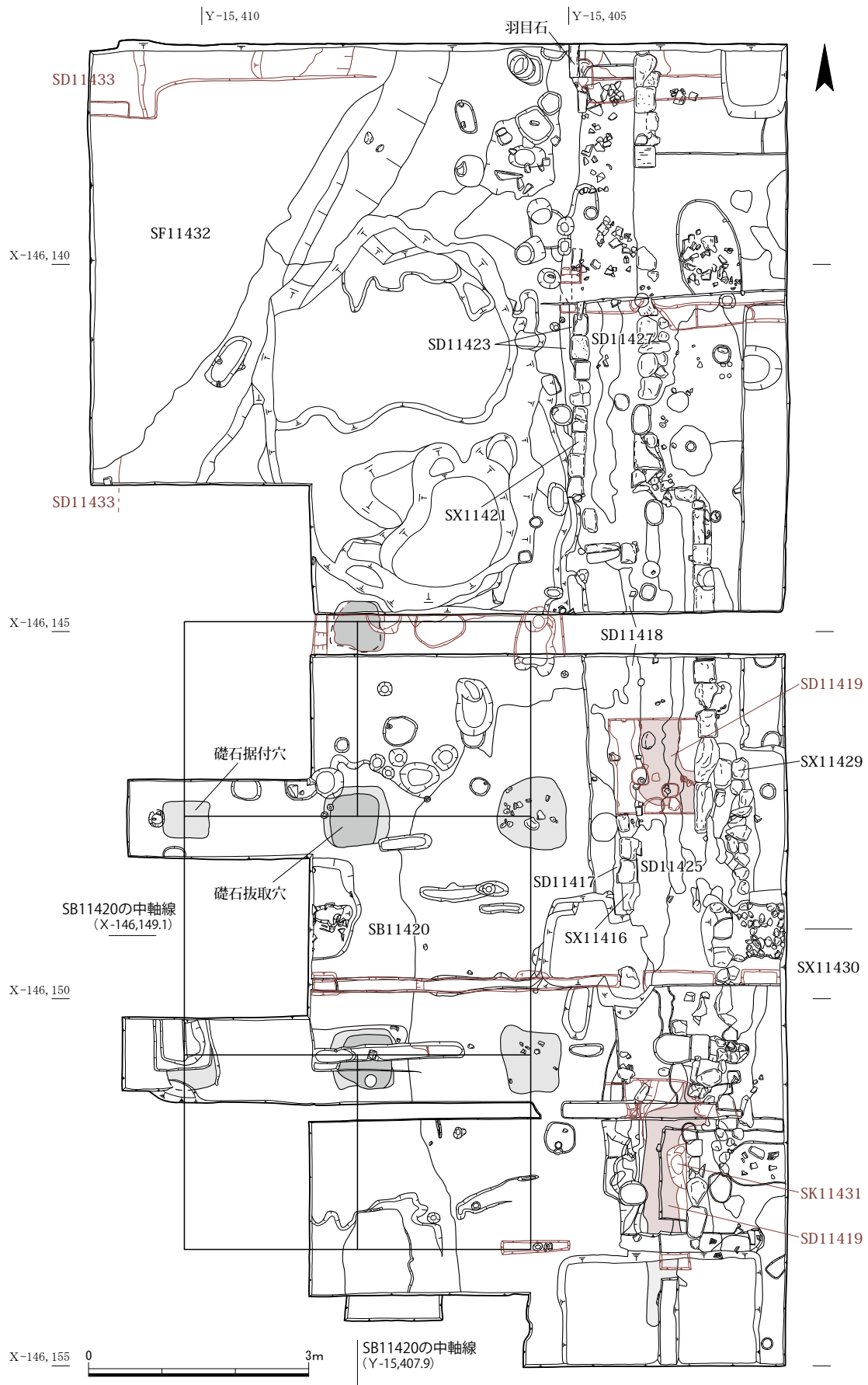
基壇外装は、東面で凝灰岩の地覆石SX11416を確認した。原位置を保つ地覆石は5ないし6石のみだが、一部で据付溝SD11417を確認できた。東南隅は攪乱により失われていたが、東北隅はよく遺存しており、細長い地覆石を1石配置することで回廊の基壇よりも約75cm幅を広げる。この東北隅の地覆石の内側および底面に炭混じりの焼土が認められるとともに、下層の土坑SK11431から中世の土師器や瓦が出土しているので、一連の基壇外装は創建期のものではなく、焼損にともなう中世の再建・改修後の姿と判断できる。廃絶の時期は、西面中回廊の東雨落溝SD11427の埋土に近世の瓦が含まれない点や絵画資料が参考となる。また、地覆石の抜取溝SD11418を検出し、そこにも炭が混じる。なお、羽目石はすべて失われているが、地覆石上面の風蝕差から、羽目石の位置が判明した。地覆石の凝灰岩は、地獄谷産を主として、二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩も一定量認められる。

南北溝 SD11419 再建・改修後の門にともなう階段は確認できなかったが、下層で階段痕跡を確認した。門SB11420の東側2カ所で、幅52cmほどの南北素掘溝SD11419を検出した。50cmほど東へ張り出し、張り出しの南北距離は約4.4mである。SB11420のほぼ中央で東側へと張り出すので、SB11420の階段の地覆石(最下段の踏石)を抜き取った溝とみなせる。階段の幅は、SB11420の中央間よりも若干広くなる。中世以前の階段で、創建期にさかのぼる可能性もある。

南北溝 SD11425 門SB11420の東雨落溝。門基壇の地覆石SX11416に接して設けられ、溝の幅は76cmである。東側石は地獄谷産の流紋岩質溶結凝灰岩を主として、一部に二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質角礫岩もみられる。埋土には中世の瓦を含む。



第9図 625次北区北壁土層図 1:80



第 10 図 625 次北区遺構平面図 1:80

西面中回廊の基壇 北面回廊における既往の調査結果により、東金堂院回廊は礎石建ちの単廊と判明している。しかし、調査区北半には近現代の大きな攪乱があり、回廊基壇の削平も著しく、回廊礎石据付穴や抜取穴は検出できなかった。

門の基壇と同様に、回廊の基壇も凝灰岩製の基壇外装をともない、基本的には赤橙褐色土を削り出して造る(第9図)。ただし、調査区北側には北東から南西にのびる谷筋があり、調査区北端はその谷筋の東肩付近にあたる。この谷筋を礫混黄褐色土(基盤整地土)で埋めており、一部赤橙褐色土上にもおよぶ。

基壇外装は、西側では検出できなかったが、東側で地覆石 SX11421 を確認した(第9図)。長辺約 45cm、短辺約 30cm を標準として大小ある。厚さはいずれも 10cm 程度。また、羽目石も一部残るが、高さ 10cm 程度を残すのみである。地覆石・羽目石ともに凝灰岩製で地獄谷産を主とするが、調査区北端の羽目石は二上山産である。地覆石の設置には据付溝 SD11423 をともない、部分的に新旧 2 時期の据付溝を確認できた。地覆石の大きさは不揃いである。いずれの埋土にも炭を含み、据付溝 SD11423 に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定の結果によれば(『紀要 2021』)、基壇外装の地覆石 SX11421 は平安時代後期以降に再建・改修したものと判断できる。

南北溝 SD11427 西面中回廊の東雨落溝。凝灰岩製の側石をもち、底石はない(第9・12図)。場所によって幅に広狭あるが、内法で幅 60cm 前後。門 SB11420 の東雨落溝 SD11425 よりも狭い。埋土からは古代や中世の瓦が出土。近世の瓦を含まないので、近世までには機能を停止したとみなせる。

南北溝 SD11433 調査区西端で検出した南北素掘溝。東肩のみ検出し、残存の深さは 10cm のみ。位置からみて、西面回廊の西側基壇外装抜取溝の可能性はある。

南北石列 SX11429 門 SB11420 の東雨落溝 SD11425 の東側で検出した。南北約 5m にわたって 2



第 11 図 625 次北区全景(北西から)



第 12 図 西面中回廊東雨落溝 SD11427(北から)

列に石を並べる。SD11425の東側石および東西石敷SX11430と重複し、SD11425よりも新しく、SX11430よりも古い。門の中央間を意識して敷かれたようである。

東西石敷 SX11430 調査区中央の東端で検出した、幅80cmの東西石敷。既往の調査で確認しており(『防災報告』)、やや大ぶりの石を両側縁にならべ、そのなかに直径10～15cmの円礫を敷き詰める。五重塔正面にある天文4年(1535)銘の燈籠へとつづき、燈籠よりも古いとされる。門SB11420と五重塔とを結ぶ位置にあるので、門から五重塔へといたる参道であろう。

土坑 SK11431 調査区東南部で検出した土坑。南北約60cmで、東西25cm以上となる。門SB11420の東雨落溝SD11425の東側石と重複し、それよりも古い。中世の土師器や瓦が出土した。

ii 625次南区(西面南回廊、南面築地塀)

西面南回廊 SC11440 調査区中央および北壁で4基の礎石据付穴を確認した(第13・14図)。据付穴は不整形で、一辺ないし直径1.2m程度。底に根石を敷き詰める。礎石建ちの単廊で、柱間寸法は桁行・梁行ともに約3.0m(10尺)。回廊心と門SB11420の心とは大きくずれ、回廊と門の取付構造については課題である。

南北溝 SD11441 調査区東端で検出した南北素掘溝。かろうじて西肩を検出できた程度である。西面回廊SC11440との位置関係からみて、基壇外装の抜取溝の可能性はある。

南面築地塀 SA11450 調査区南端で検出した、東西方向の築地塀。東金堂院の南面区画施設であるとともに、寺城南限の区画施設でもある。塀の北縁の一部で積み土を検出できたにすぎず、調査区の南縁から1mほどの位置で崖状に切り崩されているため、本来の築地の基底幅は不明。褐色の築地積土は、礎石SS11445を境に上下2層にわかれ、上層は平安時代ないし中世に積み足されたもの。下層は奈良時代の積土である。

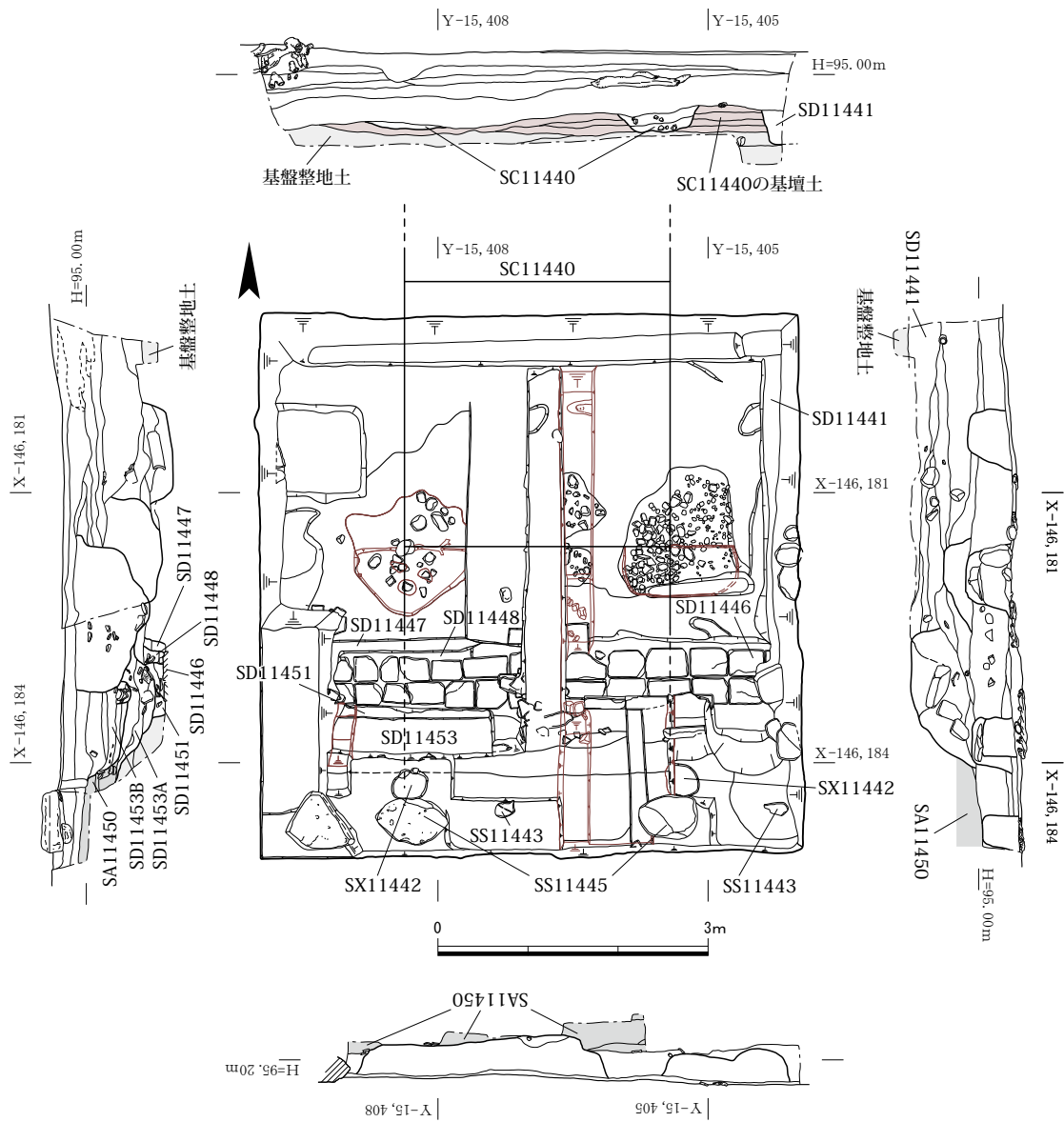
平面では検出できなかったが、西壁で確認できる溝状の落込みはSA11450の北雨落溝の可能性もある(東西溝SD11453)。2時期がみられ、SS11445の上下で新旧にわけた築地積み土の理解とも整合する。上層のSD11453Bからは鎌倉時代の土師器が出土した。

礎石 SS11445 南面築地塀SA11450の上層積土を除去したところで検出した、約3.0m(10尺)間隔で東西にならぶ2基の礎石(第15図)。長径70cm程度。西面南回廊SC11440と柱筋が揃い、南北の間隔も約3.0m(10尺)となる。SC11440との位置関係からみて、南面築地塀に開く門の礎石であった可能性もある。

柱穴列 SX11442 礎石SS11445の北側に接して東西にならぶ、2基の平面円形の掘立柱穴。心々間距離は約3.0m(10尺)で、検出面はSS11445と同じ。直径約40cm、残存の深さ30cmほど。柱穴の断面は斜めに傾かず、ほぼ垂直。SS11445と併存すると考えられる。

小礎石 SS11443 礎石SS11445の柱筋上に東西にならぶ、2基の小さな礎石。長辺20cmほどの板石で、心々間距離は約3.0m(10尺)。検出面はSS11445および柱穴列SX11442と同じ。

東西石組溝 SD11446 調査区中央で検出した、凝灰岩の切石を組んだ東西溝(第15図)。SD11447はその据付溝。底石を2列に敷き、その上に側石を立てる。側石はほとんど抜き取られており(SD11448・11451)、南側3石を残すのみ。長さ45cm、高さ30cm、厚さ15cm程度。底石は平面長方形で、いずれも長辺45cm、短辺30cm程度を基本とする。15cm(5寸)を単位とする規格材だろう。底石の配列は東半に比べ西半では大きさにもばらつきがあり、目地も通らない。また、北列西端の底石には仕口が



第13図 625次南区遺構平面図・土層図 1:80



第14図 625次南区全景（北から）



第15図 625次南区南半の遺構検出状況（北東から）

あり、西端の側石も北辺上角を欠く仕口があるので転用材とみられる。溝の埋土から平安時代前期の土師器が出土したことから、平安時代の石組溝と考えられる。

東西溝 SD11455 調査区中央で検出した、幅 65cm 程度の東西素掘溝。検出面は東西石組溝 SD11446 よりも上層であり、埋土に中世の瓦や土師器を含む。

iii 640 次北区（西面北門、西面北回廊、西面中回廊）

西面北門 SB11600 礎石の据付穴・抜取穴を 8 基分検出した（第 16 図）。いずれも一時期分のみ確認した。桁行は 3 間で総長が約 8.6 m（29 尺）、梁行は 2 間で総長が約 4.7 m（16 尺）となる。柱間寸法は、桁行が中央間約 3.3 m（11 尺）、両脇間約 2.7 m（9 尺）で、梁行が約 2.4 m（8 尺）等間となる。八脚門であったと考えられる。間口の中心は X-146,101.5 ほどで東金堂とほぼ揃い、棟通りは Y-15,407.9 ほどで 625 次北区で検出した西面南門 SB11420 とほぼ揃う。なお、後述するように、側柱筋から基壇外装および雨落溝までの距離から、軒の出は 5.5 尺以上あったと想定できる。

礎石据付穴の全形を確認できた西北隅の 1 基は直径約 90cm の円形で、据付の深さは 20cm あまりを残すのみである。埋土は灰褐色や明褐色の砂質土である。ここには拳大ほどの根石が残っていた。

西面北門の基壇 基壇土は、長方形土坑 SK11645 の北壁で断面観察をおこなったところ、標高約 94.8 m の地山上に 30～40cm 積まれていたことを確認した。掘込地業および版築がおこなわれた様相は確認できなかった。また、基壇土が積み足された様相も確認できなかった。

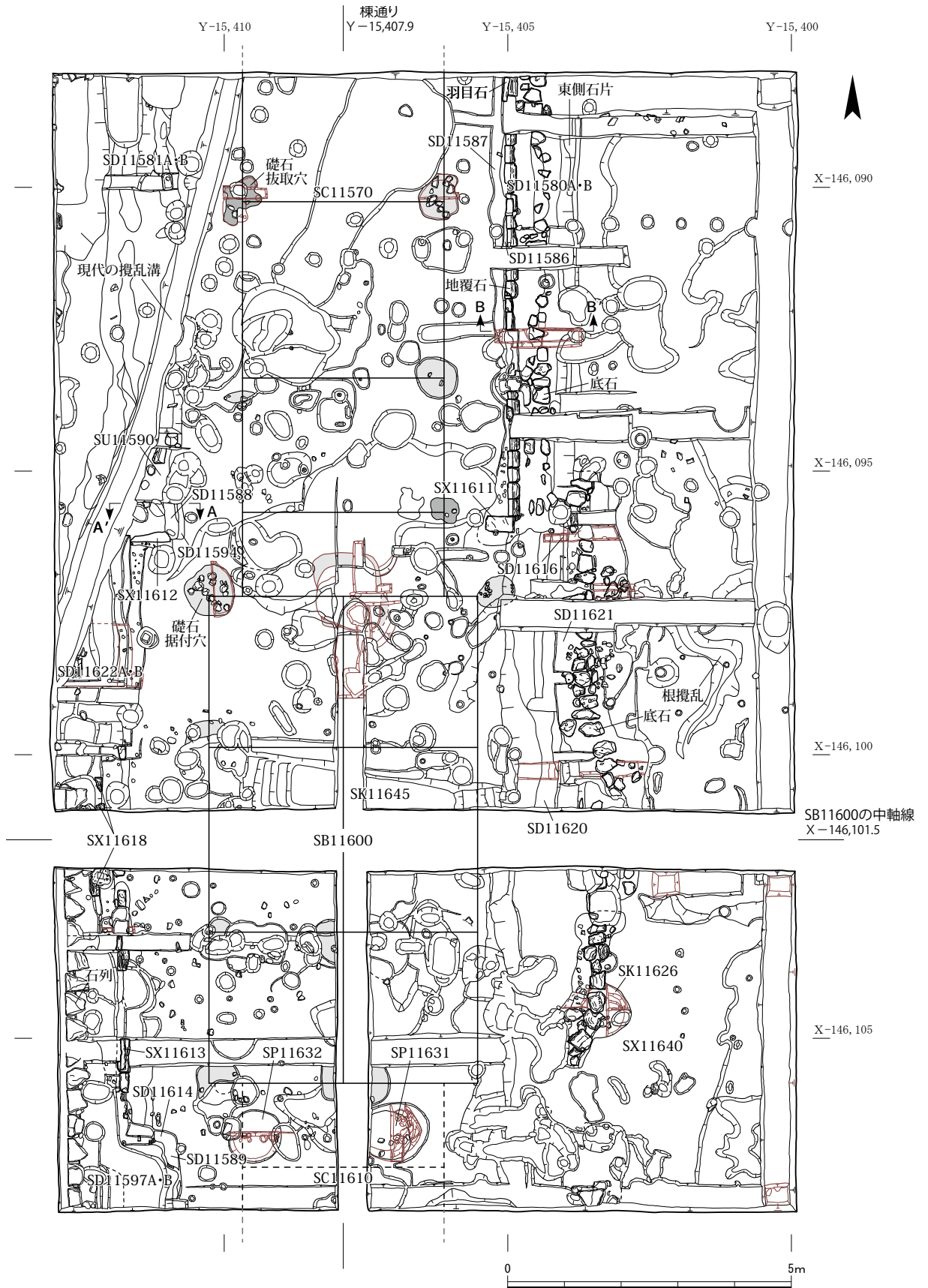
基壇外装にともなう遺構としては、北辺東で地覆石 SX11611（見付 60cm、見込 27cm）を、北辺西で地覆石 SX11612（見付 68cm、見込 18cm）を、西辺南で基壇外装の石列 SX11613（見付 25～60cm、見込 10～20cm、成 12～24cm）を、南辺西で基壇外装抜取溝 SD11614（幅 17cm、深さ 5 cm）を検出した。SX11611 には奈良市地獄谷産の流紋岩質溶結凝灰岩、SX11612 には泥岩、SX11613 には地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩、細粒花崗岩、二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩の切石が用いられる。SX11611 の東辺は、門と回廊廃絶後に敷設された素掘溝 SD11620 の掘削により滅失している。

北辺西と南辺西に残る SX11612 と SD11614 から、基壇の南北規模は約 10.8 m（36.5 尺）を測る。東辺の位置は、SD11620 や根攪乱 SX11640 で破壊され判然としなかった。SB11600 の棟通りから対称形であるとすれば、東西の基壇規模は約 8.0 m（27 尺）に復元できる。SB11600 の側柱筋から SX11613 の外縁までの距離は約 1.6 m（5.5 尺）であり、軒の出はこれ以上と考えられる。

基壇の西辺中央から約 40cm 西では、西階段の地覆石と考えられる凝灰岩切石 SX11618 を南北幅約 2.1 m 分を検出した。3 石あり、北の 1 石が奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩、ほか 2 石が二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩である。残りの良い南の 1 石は見付 32cm、見込 18cm を測る。想定される基壇の東辺中央付近の外（東）側でも、部分的に階段の積み土と思われるにぶい褐色砂質土を検出した。

これらの基壇外装や階段にともなう遺構は、西面北回廊 SC11570 の検出状況などから、鎌倉時代初頭以降の再建にともなうものと考えられる（上層）。ただし、SX11613 の中には地覆石と羽目石が一体の特異な形状の石材があり、転用材とみられ、再建後に改修された可能性も考えられる。

想定される東辺の位置で部分的に掘削をおこなったところ、下層の地覆石抜取溝 SD11616 を検出した。幅 15cm、深さ 7 cm で、埋土はにぶい褐色砂質土である。上層の基壇外装は、下層の位置をほ



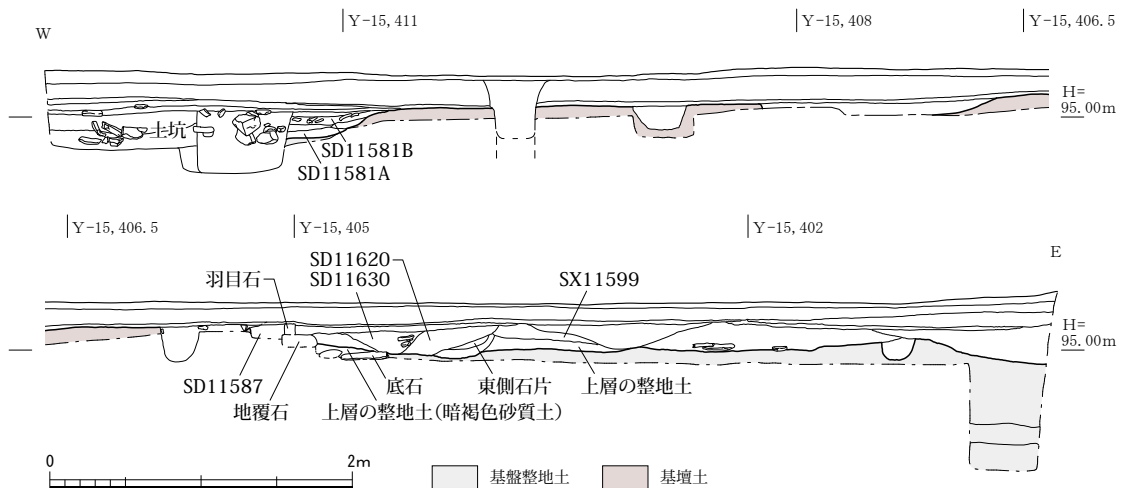
第16図 640次北区遺構平面図 1:100

ば踏襲して設置されたとみられる。

西面北門の雨落溝 基壇の東辺と西辺のすぐ外側で、雨落溝を検出した。基壇の外形に沿って屈曲し、西面回廊の雨落溝に接続する。後述する西面回廊と同様に、少なくとも2時期の変遷がある。

上層東雨落溝は、素掘溝 SD11620 などによって大半が滅失しており、判然としなかった。下層東雨落溝 SD11621 は、側石の据付・抜取溝が未検出であるが、底石を検出した。この石材は、西面北回廊 SC11570 の下層東雨落溝 SD11580A の底石と一連に続くため、雨落溝の底石と考えられる(第18図)。底石は幅 10～50cm で、自然石の三笠安山岩や細粒花崗岩を主体とする。底石は、基盤整地土を掘り込んで据えられているものがあり、奈良時代の創建期に遡る可能性がある。SD11621 の内法幅は、SD11616 の東辺から底石の東辺まで約 90cm (3尺) を測り、少なくともこれ以上であったと考えられる。なお、底石の下で、円形の土坑 SK11626 を検出した。直径 1.0 m、深さ 13cm で、埋土はにぶい褐色砂質土である。

上層西雨落溝 SD11622B は、後世に築かれた石列や現代の攪乱溝によって大半が滅失していたが、褐色砂質土の埋土を部分的に確認した。南端付近の埋土は、西面中回廊 SC11610 の上層西雨落溝 SD11597B と一連で、SD11597B から出土した鎌倉時代～室町時代の土師器などが上層の廃絶時期を示すと考えられる。下層西雨落溝 SD11622A は、にぶい褐色砂質土の堆積を確認した。幅 80cm、深



第17図 640次北区北壁土層図 1:50



第18図 SB11600とSC11750接続部(北東から)



第19図 SC11570の地覆石と底石(東から)

さ7cmが遺存する。この埋土の一部を部分的に掘削したが、底石や側石は確認できなかった。

西面北回廊 SC11570 礎石の据付穴・抜取穴を5基分検出した。いずれも一時期分のみ確認した。梁行1間の単廊で、桁行2間分を検出した。桁行は北側の1間が約3.1m(10.5尺)、南側の1間が約2.4m(8尺)となる。SB11600との取り付けの距離は約1.5m(5尺)である。梁行は約3.5m(12尺)となる。棟通りはSB11600と揃う。なお、後述するように、側柱筋から基壇外装および雨落溝までの距離から、軒の出は4.5～7.5尺と考えられる。

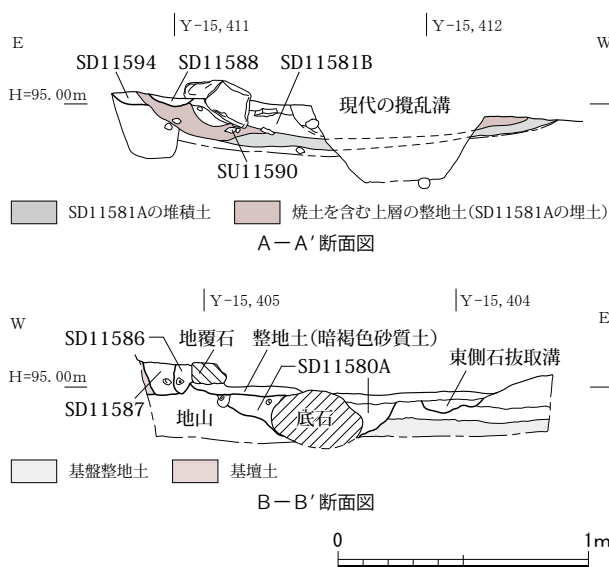
礎石据付穴の一部には、拳大ほどの根石が残っていた。礎石据付穴の全形を確認できた東側柱筋の北の2基は、直径約70cmの円形である。このうち北の1基に対して断割調査をおこなったところ、据付の深さは10cmあまりを残すのみであった。埋土は黄褐色砂質土である。

西面北回廊の基壇 基壇土は、西面北門SB11600の基壇土である明黄褐色粘質土と一連に続く様相を平面的に確認した。門と回廊の境で基壇土が積み分けられた様相は確認できなかった(第18図)。

基壇の東辺で地覆石を、西辺で地覆石抜取溝SD11588を検出した。基壇の東西規模は約6.2m(21尺)を測る。SC11570の側柱筋から基壇外装外縁までの距離は、東西ともに約1.3m(4.5尺)である。

東辺の基壇外装は、いずれも奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩の切石が用いられる。地覆石は、暗褐色砂質土に据えられている。この暗褐色砂質土は、下層東雨落溝SD11580Aの底石を覆うことから、下層が廃絶した後の上層の構築にともなう整地土と考えられる(第20図下)。地覆石は20石が残存し、見込約18cm(6寸)、成約9cm(3寸)で、見付はばらつきがあるものの29cm(1尺)前後のものが複数ある。地覆石の上には、羽目石と思われる石材3石が残る。これらは見付27～40cm、見込9～13cm、成6cm分が遺存する。点在しており、3石の中に東石に比定できるものがあるかは判断できない。

地覆石の西側では、据付溝SD11586を検出した。最大幅8cm、深さ11cmで、埋土はにぶい褐色砂質土である。SD11586の西側で、下層の地覆石の据付ないし抜取と思われる南北溝SD11587を検出した(第17図)。幅10～30cm、深さ13cmで、埋土は褐色砂質土である。以上から、上層の基壇外装は下層の位置をほぼ踏襲して設置されたと考えられる。



第20図 640次北区部分断面図 1:30



第21図 上層整地土とSU11590(北から)

西辺の地覆石抜取溝 SD11588 は、南で SB11600 の北辺西の地覆石 SX11612 に接続する。幅 23cm、深さ 3 cm で、埋土は明褐色砂質土である。SD11588 の下には、焼土を含む褐色砂質土（上層の整地土）がある（第 20 図上）。この整地土は東西約 1.6 m の範囲に広がり、西雨落溝 SD11581A・B と重複する。さらに SD11588 の東側で、下層の地覆石据付溝と思われる南北溝 SD11594 を検出した。幅 20cm、深さ 5 cm で、埋土は黄褐色砂質土である。SD11594 は、焼土を含む褐色砂質土以前の遺構である。

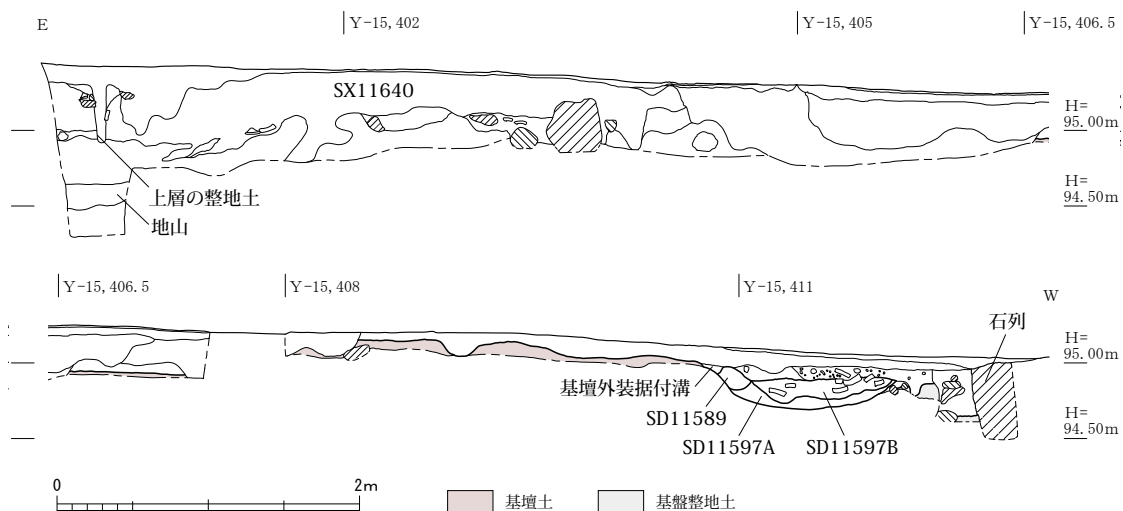
以上から、次に示す基壇外装と雨落溝の 2 時期の変遷がわかる。まず、SD11594 にともなう下層の地覆石が抜き取られた。次に、焼土を含む褐色砂質土で下層西雨落溝 SD11581A が埋められるとともに、整地がおこなわれた。この整地土に上層の地覆石が据えられた。上層の地覆石は廃絶時に抜き取られ、SD11588 として痕跡を残すと考えられる。

西面北回廊の雨落溝 基壇の東辺と西辺のすぐ外側で、2 時期分の雨落溝を検出した。上層東雨落溝 SD11580B の東肩では、側石と思われる風化した凝灰岩片を部分的に検出した。東側石は、下層東雨落溝 SD11580A の東側石抜取溝を利用して据え付けたとみられる。西側石はなく、地覆石が兼ねていたと考えられる。SD11580B の内法幅は約 90cm（3 尺）を測る。SD11580B に底石は敷設されておらず、地覆石を据える整地土（暗褐色砂質土）が雨落溝の底面となっていた（第 20 図下）。SD11580B は、上層の基壇外装に対応した雨落溝と考えられる。

下層東雨落溝 SD11580A は底石を検出し、また東側石抜取溝を断面観察で部分的に確認した（第 20 図下）。SD11580A の内法幅は、下層の地覆石に関連するとみた南北溝 SD11587 から東側石抜取溝まで約 1.0 m を測る。底石は SD11580B の底面となる整地土（暗褐色砂質土）の下で検出した。幅 10～40cm で、自然石の三笠安山岩を主体とするが、一部は平瓦を転用していた。底石の一部が、基盤整地土と地山に据え付けられていることを確認した。この検出状況から、SD11580A は奈良時代の創建期に遡り、一部が改修された可能性も考えられる。

上層西雨落溝 SD11581B は、現代の溝などにより大半が滅失していたが、褐色砂質土の堆積を確認した（第 20 図上）。幅 30cm、深さ 8 cm が残存する。底石や側石は確認できなかった。SD11581B は基壇外装に対応した、鎌倉時代初頭以降の再建にともなうものと考えられる。

下層西雨落溝 SD11581A は、褐色砂質土の堆積（幅 1.3 m、深さ 5 cm）があり、この上層に焼土を含



第 22 図 640 次北区南壁土層図 1:50

む褐色砂質土の埋土（深さ 13cm）がある。焼土を含む褐色砂質土の埋土は、上層の地覆石を構築するための整地を兼ねている。底石や側石は確認できなかった。

遺物集積 SU11590 焼土を含む上層の整地土（褐色砂質土）中で、完形に近い土師器皿や軒丸瓦の瓦当部などの遺物集積 SU11590 を検出した（第 21 図）。西辺は現代の溝により滅失していたが、平面は東西 1.2 m、南北 1.1 m を測る。これらの遺物の年代はいずれも平安時代末～鎌倉時代初頭である。したがって、地覆石抜取溝 SD11588 として痕跡を残す上層の地覆石は、鎌倉時代初頭以降の再建にともなうものと考えられる。

西面中回廊 SC11610 攪乱などにより、礎石にともなう遺構は検出できなかった。しかし、基壇土、基壇外装抜取溝 SD11589、西雨落溝 SD11597A・B を検出したため、西面北門 SB11600 の南に取り付く西面中回廊 SC11610 の存在を想定できる（第 22 図）。

西面中回廊の基壇 基壇土は、西面北門 SB11600 の基壇土である明黄褐色粘質土と一連に続く様相を確認した。門と回廊の境で基壇土が積み分けられた様相は確認できなかった。後世の柱穴 SP11631・11632 で断面観察をおこなったところ、基壇土は基盤整地土の上に積まれており、掘込地業や版築がおこなわれた様相は確認できなかった。

基壇の西辺で、南北溝 SD11589 を検出した（第 22 図）。幅 22cm、深さ 17 cm で、埋土はにぶい黄褐色砂質土である。SD11589 は、SB11600 の南辺西の基壇外装抜取溝 SD11614 から続き、西面北回廊 SC11570 の西辺の地覆石抜取溝 SD11588 と東西位置が概ね揃うことから（Y-15,411.0）、基壇外装抜取溝と考えられる。SD11589 は、下層西雨落溝 SD11597A の埋土を掘り込んでいることから（第 22 図）、上層にともなう遺構と考えられる。SD11589 の東側では、調査区南壁の土層観察で基壇外装据付溝を確認した。幅 14cm、深さ 4 cm で、埋土は明褐色砂質土である。なお、基壇の東辺にともなう遺構は、攪乱により滅失していた。

西面中回廊の雨落溝 基壇東辺の雨落溝にともなう遺構は、攪乱により滅失していた。基壇西辺のすぐ西側で、2 時期分の雨落溝を検出した（第 22 図）。上層西雨落溝 SD11597B は幅 90cm、深さ 15cm で、埋土は土器や瓦を多く含む褐色砂質土である。埋土は西面北門 SB11600 の上層西雨落溝 SD11622B と一連に続く。SD11597B からは、鎌倉時代後半～室町時代前半の土師器皿・瓦器が出土し、上層の廃絶時期を示すと考えられる。底石や側石は確認できなかった。

下層西雨落溝 SD11597A は土層観察で幅 1.2 m、深さ 8 cm で、埋土は褐色砂質土である。この埋土は、上層の基壇外装を構築するための整地を兼ねている。底石や側石は確認できなかった。

iv 640 次南区（南面築地塀）

南面築地塀 SA11450 基盤整地土である黄橙色砂質土上面で硬くしまった浅黄色砂質土（厚さ 35～40cm）を確認した（第 23 図）。遺物をほとんど含まず、創建期の築地塀の積土とみられる。築地塀の南半が調査区外となり規模は不明だが、SP11650 を築地塀の寄柱とし、現在の興福寺南面の石垣から東西溝 SD11660 までの間を築地塀の基部と仮定すると、築地塀の基底幅は約 2.1 m、壁体の外側の犬走りは幅約 90cm に復元できる。

創建期の築地塀の壁体の上層で、中世の土器を含む厚さ 20cm ほどの土層を確認した。中世に改修された築地塀 SA11450B の壁体とみられる。壁体の北面は創建期の築地塀にともなう柱穴 SP11650 よりも 60cm ほど南に位置し、中世以降、築地塀の基底幅が狭められている。壁体の北側では、厚さ

60cmほどの明黄褐色砂質土の層を確認した。中世の土器や瓦片を多く含む。改修時に基部に積み足された盛土とみられる。

また、この積み足した基部盛土の下層で、SA11450Bの寄柱または添柱の柱穴を5基確認した。柱穴列は少なくとも2条あり、新旧の時期差が認められた。

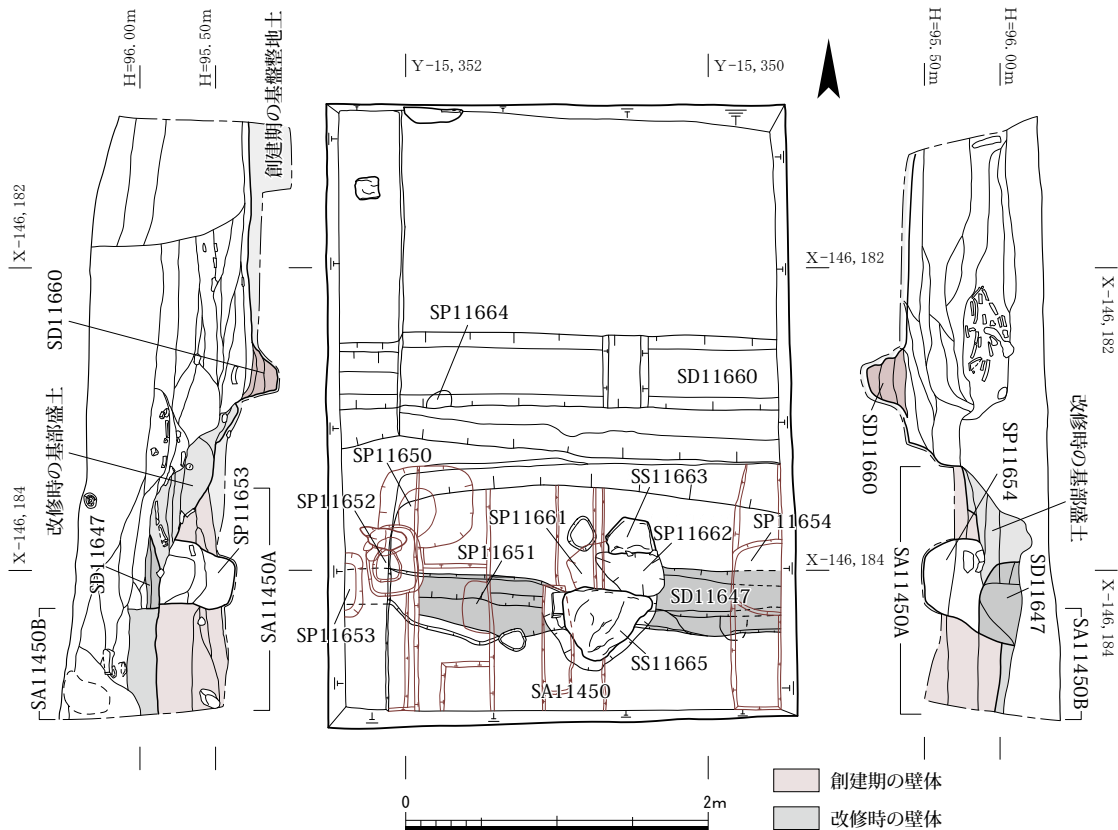
SA11450Bを改修した築地塀SA11450Cは、後述する礎石SS11665に寄柱が立つとみられる。この礎石の北面とSD11647の中軸がほぼ揃うことから、SA11450CはSA11450Bとほぼ同規模と考えられる。

柱穴 SP11650 黄橙色砂質土上面で検出した柱穴。掘方は隅丸方形で一辺約60cm、抜取穴の直径は約40cm、残存深さは35cmほど。柱穴の断面はほぼ垂直となり、掘方からも抜取穴からも遺物は出土しなかった。創建期の南面築地塀の寄柱または添柱の柱穴とみられる。

小穴 SP11664 SD11660の溝肩で検出した。直径約15cm。穴底の標高はSD11660の底面とほぼ揃う。創建期の築地塀造営にともなう足場穴の可能性はある。

柱穴 SP11653 調査区の西壁際、築地塀の基部に積み足した土や後述するSP11652よりも下層で検出した柱穴。直径約45cm、残存深さ約50cm。鎌倉時代～室町時代の土器が出土した。調査区東辺で検出した柱穴SP11654と東西に並ぶ。数度の改修の中では、早い段階の遺構とみられる。

柱穴 SP11652 調査区西辺で検出した柱穴。直径約45cm、残存深さ約30cm。掘方の中心には径約20cmの柱痕跡がみられた。掘方の北壁に沿って拳大の石を3石並べ、その上に長辺約25cm、短辺約10cmの平行四辺形の石を積む。柱の転倒防止用の押さえの石とみられる。掘方の掘られた時期は東



第23図 640次南区遺構平面図・土層図 1:50

西溝 SD11647 よりも古い。調査区中央で検出した柱穴 SP11661 と東西方向に並ぶ。

柱穴 SP11651 調査区西より、東西溝 SD11647 の下層で検出した柱穴。断面観察で掘方と抜取の痕跡を確認した。直径約 35cm、残存深さ約 40cm。築地塀 SA11450B の寄柱の柱穴とみられる。

東西溝 SD11647 基部の盛土上面から掘り込まれている東西溝。この東西溝の南側に中世以降の築地塀の壁体があり、東西溝 SD11647 は、SA11450B の基礎の石列の抜取溝の可能性がある。

礎石 SS11665 近現代の遺物包含層を除去したところで検出した、長径 60cm 程度の片麻様花崗岩の礎石。礎石掘方の下層に東西溝 SD11647 が重なる。北側に径約 45cm の柱穴 SP11662 と小礎石 SS11663 (長辺約 30cm) があり、築地塀 SA11450C の寄柱および控柱にともなう遺構とみられる。625 次南区で確認した SX11442、SS11445 と一連の遺構になる可能性が高い。

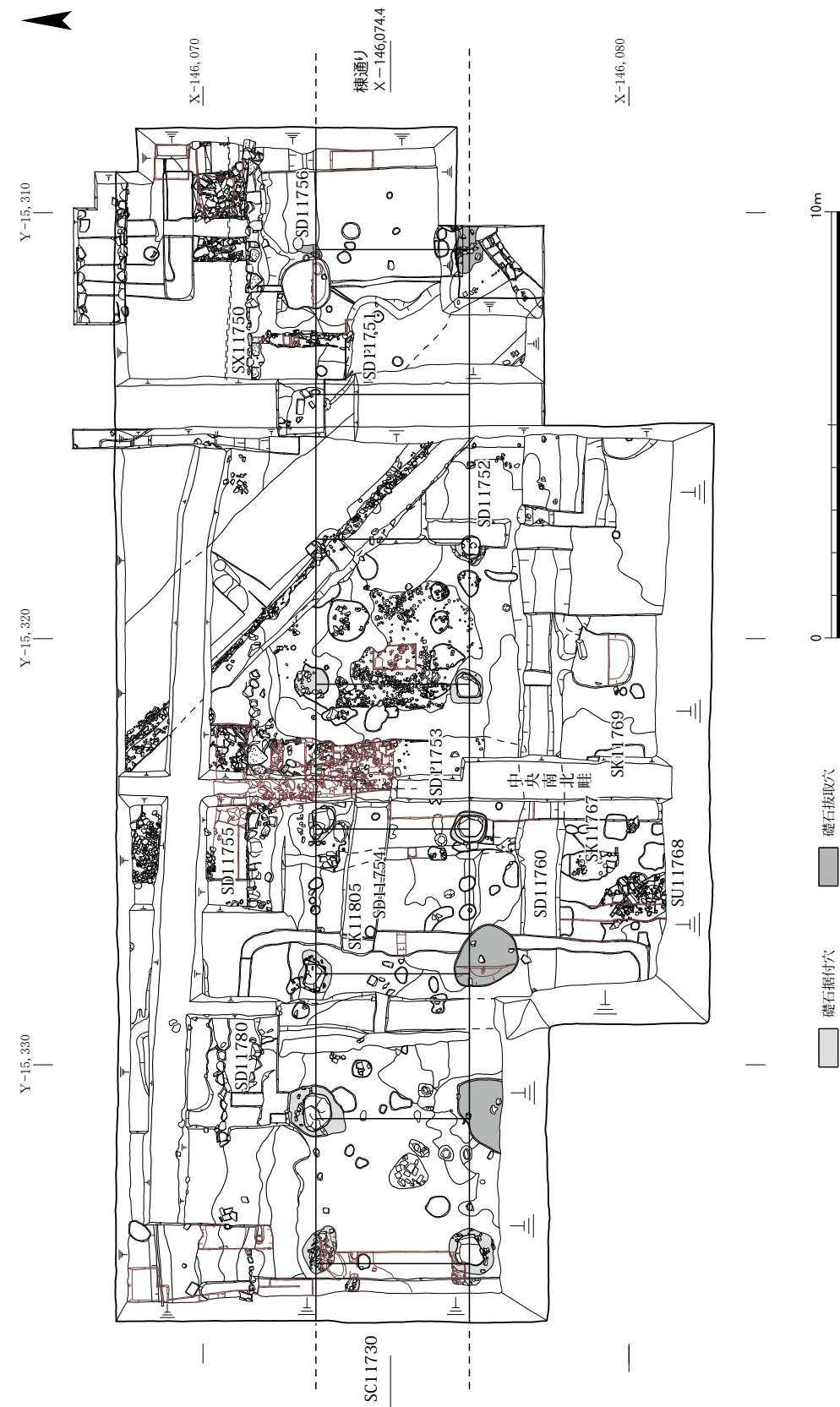
東西溝 SD11660 築地塀の北側を通る東西溝。溝底は東から西にむけてゆるやかに下がる。溝の幅は約 35cm、残存深さは 25～30cm。溝の埋土には多量の炭を含み、奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。なお、625 次南区では、この溝の延長上にあたる位置で平安時代の石組溝 SD11446 を検出している。

v 649 次調査区 (北面回廊)

北面回廊 SC11730 東西約 28m にわたって北面回廊を検出した (第 24 図)。13 ヶ所で礎石やその据付穴・抜取穴を検出し、桁行 7 間分を確認した。便宜上、調査区西端の柱位置を基点とし、柱筋ごとに西から北 1・北 2・北 3、南 1・南 2・南 3 と呼ぶ。このうち、北 2・3・4 と、南 1・4・5・6 の計 7 ヶ所には礎石が残存していた (第 28 図)。ただし、北 4 の礎石は破損しており、原形をとどめていない。7 基の礎石のうち、北 2・3・4 と、南 4 の計 4 基は既往の調査 (『防災報告』) で確認していたもので、今回の調査で新たに検出した礎石は南 1・5・6 の計 3 基である。残り 6 ヶ所の礎石は抜き取られていたが、北 1・5 の 2 ヶ所で据付穴と根石を検出し、北 8 と南 2・3・8 の 4 ヶ所で抜取穴を検出した。検出した礎石やその据付穴・抜取穴の柱位置から、北面回廊は梁行 1 間の単廊で、柱間寸法は桁行約 3.3 m (11 尺) で等間、梁行約 3.6 m (12 尺) となる。棟通りは X-146,074.45 付近で、東金堂の北側に残る北面回廊礎石間の棟通りの数値とほぼ合致する。

礎石は直径ないし一辺が 50～80cm で、厚さは 30～50cm。石材は北 2・3・4 と、南 4・6 が安山岩、南 1・5 が花崗岩であり、いずれも柱座をつくらない自然石が用いられていた。一部の礎石には被熱痕跡があり、南 4 には被熱痕跡が直径約 36cm (1.2 尺) の円形部分を除いて確認できたことから、径 1.2 尺の円柱が立った状態で被災したことが判明した (第 26・27 図)。礎石の上面の標高は、北 2 は 95.7 m、北 3 は 95.6 m、南 1 は 95.7 m、南 4・5・6 はそれぞれ 95.6 m である。礎石上面の標高は既往の調査 (『防災報告』) で判明している北面回廊の成果と同じである。新たに確認した礎石のうち、南 1 の据付穴の検出高は標高 95.5 m で、回廊基壇積み足し土上面で検出した。一方、南 5・6 の据付穴の検出高は標高 95.4 m で、回廊基壇土上面で検出した。

断割調査をおこなった北 1 の礎石据付穴は長径約 1 m の楕円形で、深さは約 30cm、埋土は灰黄褐色砂質土と褐灰色砂質土で、径 10～20cm の根石が残存する。根石にはチャートや片麻岩、安山岩、花崗岩などが使われていた。出土した遺物は、奈良時代から鎌倉時代の土師器、須恵器甕、瓦器の皿・碗や中世の軒丸瓦などである。同じく断割調査をおこなった、回廊基壇積み足し土上面で検出した南 1 の礎石据付穴は、埋土が灰黄褐色砂質土とにぶい黄橙色粘質土で、土器片や砂利片を含む。埋土の

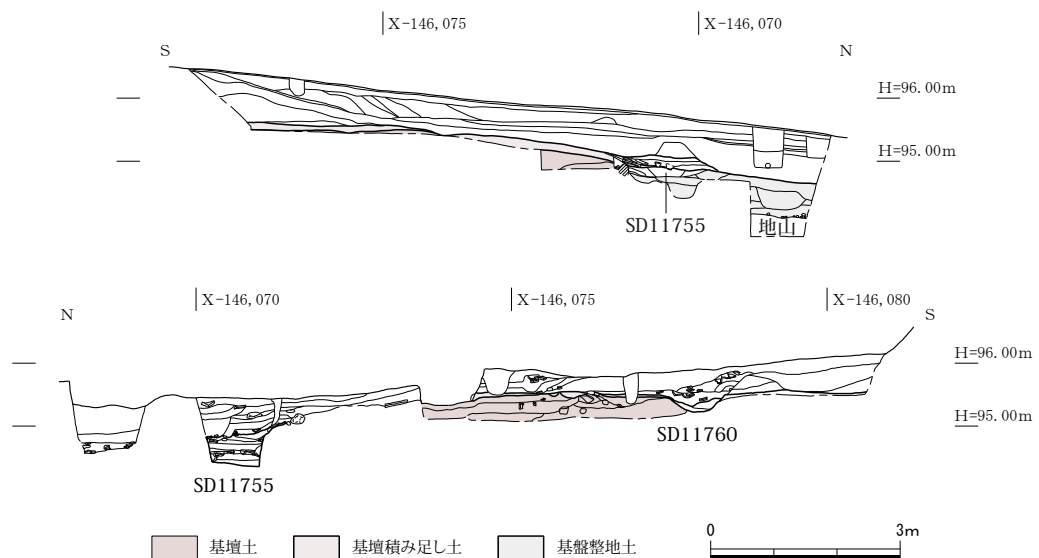


第 24 図 遺構平面図 1:150

灰黄褐色砂質土には 10～20cm 程度の奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩や花崗岩を含む。

なお、回廊基壇積み足し土を一部除去した回廊基壇土上面でも礎石据付穴・抜取穴の検出を試みたが、回廊基壇土上面では重複する位置で据付穴・抜取穴を検出できなかった。以上のように、回廊基壇積み足し土上面と回廊基壇土上面で据付穴・抜取穴が重複しないこと、回廊基壇積み足し土上面と回廊基壇土上面それぞれにおいて、他の場所で据付穴・抜取穴を検出できなかったこと、据付穴の埋土に奈良時代から鎌倉時代の土器や瓦を含むこと、根石に凝灰岩が使用されていることなどから、礎石は創建当初の位置をほぼ踏襲して据え直された可能性がある。

基壇 創建期の基壇は、基盤整地土の一部を基壇土として削り出し、回廊中央では基盤整地土の上に黄橙色粘質土の基壇土を積んで構築する（第 25 図下）。黄橙色粘質土の基壇土は調査区中央で約 10cm の厚さを確認した。掘込地業および版築がおこなわれた形跡はない。また、調査区中央から西にかけて、部分的に 5 cm 程度、褐灰砂質土によって基壇土の積み足し、補修をおこなった痕跡を確認した。基壇土上面の標高は後世の削平を受けているため、南側柱筋付近で 95.2～95.5m、北側柱筋付近で 95.1～95.4m と幅があり、特に北側で基壇土の流出、削平が著しいと考えられる。残存する基壇の高さは、北側が基盤整地土上面（標高約 94.6 m）から 50cm 程度、南側が基盤整地土上面（標



第 25 図 調査区西壁（上）・中央南北畦（下）土層図 1:120



第 26 図 回廊礎石と基壇断割（西から）



第 27 図 礎石に残る円柱の当たり痕と被熱痕（北から）

高約95.5m)から10cm程度。

基壇の北辺で長辺30cm程度の石を3段積んだ乱石積基壇SX11750を(第29図)、南辺で後述する素掘りの南雨落溝SD11760を検出した。基壇の南北規模は約6.6m(22尺)を測る。北面回廊SC11730の北側柱筋から乱石積基壇の外縁までの距離は約1.6m(5.5尺)、南側柱筋から南雨落溝SD11760の北の立ち上がりまでの距離は、約1.4m(4.5尺)である。軒の出は、南が約1.4m、北は北雨落溝SD11755の南の上端までの距離が約1.6mであることから、それ以上と考えられる。

乱石積基壇SX11750を構築する石材は奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩や二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩、安山岩、花崗岩など多様な種類を用いており、安山岩が最も多い。また、基壇外装に転用されたとみられる凝灰岩切石と安山岩や花崗岩などの自然石が混在することから、この乱石積基壇外装SX11750は奈良時代の創建当初のものではなく、創建当初の位置を踏襲しながら平安時代以降の度重なる東金堂院の罹災による被害を受けて再建したものと考えられる。なお、南辺では基壇外装の痕跡を確認できなかった。

調査区東壁で、北側柱筋のほぼ直下に素掘りの東西溝SD11756を検出した。溝の幅は約50cm、深さは約10cmで、溝の埋土はにぶい黄澄砂質土で土中に径3cm程度の礫を含む。SD11756の西の延長と推測される溝状の遺構を、北側柱筋に沿って北3の西側まで断続的に平面で確認した。北1から2にかけては回廊基壇積み足し土を残した状態であったので、続きを確認できなかった可能性がある。SD11756は回廊基壇土を掘り込んで構築されていることから、創建期の回廊にともなう遺構であると考えられ、壁持地覆石の抜取溝の可能性が指摘できる。

雨落溝 基壇の北辺と南辺で東西方向に延びる素掘りの雨落溝を検出した。北雨落溝SD11755は基盤整地土を掘り込む。北側の立ち上がりが明確でなく、確認できた幅は約1.2m以上、残存する深さは20～50cmである(第25図)。溝の埋土は下層から炭や焼土を多量に含む層と、瓦を多量に含む層が互層になっている。遺物は主に奈良時代から平安時代にかけての瓦が多量に出土した。SD11755を埋めて構築された東西石組溝SD11780の埋土からは鎌倉時代～室町時代の土師器や瓦器が出土し

ていることから、SD11755は室町時代にはすでに廃絶していたと考えられる。

南雨落溝SD11760は基盤整地土を掘り込む。幅約70cm、深さ約30cm、検出した長さは約13mである。埋土には焼土が集中して堆積する様子を確認した。溝の埋土から出土した遺物は、古代から中世の土師器、須恵器、瓦器と平安時代の軒平瓦や中世の巴瓦などである。したがって、SD11760も中世の段階で溝がほとんど埋まった状態になっていた可能性が高い。

暗渠 回廊基壇を南北に横断する暗渠4条(SD11751～11754)を検出した。調査区東端で検出したSD11751は側と底に平瓦を据えた瓦組暗渠で、回廊基壇土と乱石積基壇SX11750の裏込土内に敷設されている(第31図)。瓦組暗渠の内部の幅25cm、深さ10cm。溝底の標高は、南側では95.1m、北側で



第28図 北面回廊検出状況(西から)

は 95.0m であり、南から北に向かって緩やかに勾配をつけていることを確認した。暗渠内の埋土に焼土を含む。SX11750 の最上段の石の間に出口となる空間を設け、北雨落溝 SD11755 に流れ込むように構築されており、SX11750 にともなう暗渠と考えられる。Y-15315 付近で検出した SD11752 は幅 30cm、深さは 10cm 程度。埋土にこぶし大の石を少量含む。調査区中央南北畦の東側で検出した SD11753 は幅約 1.1 m、深さは 15cm。瓦組で構築される。回廊基壇土の黄橙色粘質土上面の標高 95.4m 前後で検出した。溝底の標高は、南雨落溝 SD11760 との合流地点では 95.3m、北雨落溝 SD11755 との合流地点では 95.0m であり、SD11760 から SD11755 に向かって傾斜をつけて設けられている。複数回の据え直しの後、奈良時代の瓦や石が大量に廃棄された状態で埋まる。北 4 と南 4 の礎石のすぐ西側で検出した SD11754 は幅 30cm、深さ 20cm。底部の標高は、SD11760 との合流地点では 95.4m、北 4 の西側では 95.3m であり、南から北に向かって勾配をつけている。土坑 SK11805 の南壁断面で、回廊基壇積み足し土である褐灰砂質土を掘り込む様子が確認できることから、SD11754 は回廊に基壇土を積み足した際に構築されたと考えられる。これらの暗渠は、暗渠底部の南北で高低差が認められ、回廊基壇土内で南から北へ勾配を付けて構築されていることから、東金堂院内庭の雨水を南雨落溝で受け、暗渠を通じて北雨落溝に排水していたと考えられる。

土 坑 回廊南側にあたる東金堂院内庭の基盤整地土上で、土師器を多量に含む土坑 2 基を検出した。土坑 SK11767 は東西約 0.7m、南北約 1.1m で、埋土に炭を多量に含む（第 30 図）。主に平安時代の土師器が出土した。同じく土坑 SK11769 は、中央南北畦に西半がかかっていたものの、東西約 0.3m、南北約 1.1m 分を確認した。埋土に炭を含む。こちらも平安時代の土師器が出土した。

瓦溜 SU11768 内庭の整地土（褐灰粘質土）中で、東西約 0.9m、南北約 1.6m の範囲に瓦溜 SU11768 を検出した（第 30 図）。瓦を含む整地土は調査区南端まで続き、調査区南壁でも瓦が整地土中に含まれている様子を確認した。瓦は主に奈良時代のものが出土している。



第 29 図 乱石積基壇 SX11750 (北西から)



第 30 図 土坑 SK11767・瓦溜 SU11768 (北から)



第 31 図 南北溝 SD11751 と乱石積基壇 (西から)

4 出土遺物

鐘 楼 土器類は明治時代の陶磁器と鎌倉時代から室町時代の土師器皿・瓦器碗が主体的で、少量ながら古代の須恵器を含む。瓦磚類は礎石建ち基壇建物としては瓦の出土量は多くない。また軒丸瓦はほとんどが中近世の巴文であり、創建期にさかのぼるとみられる軒瓦が1点あるほかは、胎土・焼成から古代のものとみられる破片が数点出土したにとどまる。焼失・再建のたびに片付けがおこなわれたためであろう。平安時代の軒瓦が出土した瓦廃棄土坑 SK11385 はそうした片付けにともなうものと考えられる。

東金堂院西面回廊 五重塔正面（625次北区）では平安時代から鎌倉時代の土師器皿、瓦器碗が出土しているが、いずれも小片である。瓦磚類は出土量自体が少ないが、創建期にさかのぼる軒平瓦 6671A・Eのほか、半肉彫で水波文をあらわす緑釉磚が出土した。

東金堂院西南隅（625次南区）では、平安時代末頃から鎌倉時代にかけての土師器皿が比較的多く出土した。土師器皿や瓦器の年代にばらつきがあることから、盛土内に含まれていた土師器皿の可能性が高い。瓦磚類は中近世の軒瓦および刻印瓦が多数出土したが、西面南回廊 SC11440 の周囲や東西石組溝 SD11446 を埋積する土層からは奈良時代を中心とする古代の瓦がまとまって出土した。金属製品は銅製の小型の釘や鋌のほか、方形の垂木先金具片がある。

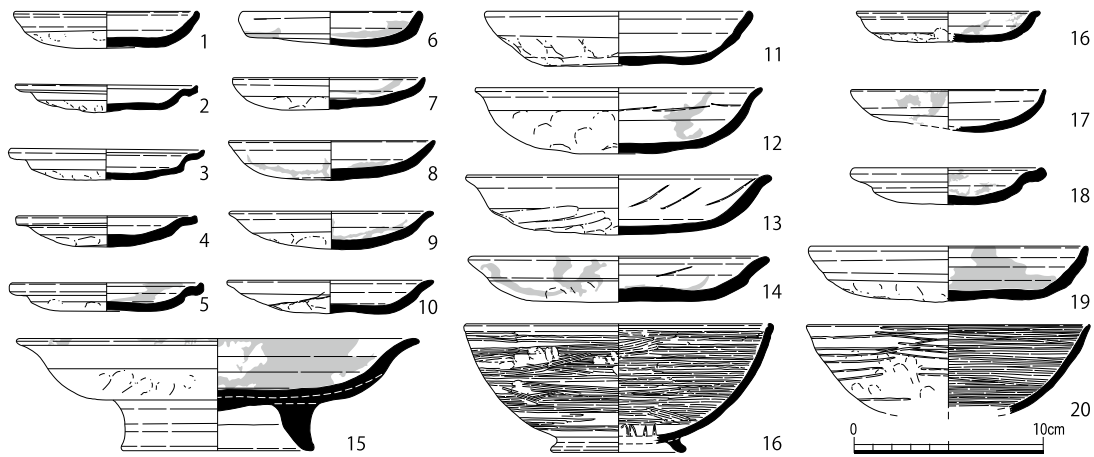
東金堂正面（640次北区）で出土した土器類は、中近世の土師器が中心で、古代の須恵器・土師器を少量含む。遺物集積 SU11590 では、鎌倉時代前半の土師器皿が12個体以上出土しているが、完形近くまで復することができたのは6点のみであり、完形品と破片が混じった状態で廃棄されたものと考えられる。西面中回廊 SC11610 の上層西雨落溝 SD11597B の埋土から、鎌倉時代後半～室町時代前半の土師器皿と瓦器が出土した。瓦磚類は、西面中回廊 SC11610 の上層西雨落溝 SD11597B の埋土から、平安時代末～鎌倉時代初頭の鬼瓦が出土した。奈良時代の瓦では、興福寺式 6301 型式の新種が西面北回廊 SC11570 の上層西雨落溝 SD11581B の堆積土から出土した。他に、7世紀後半から室町時代の瓦が出土している。金属製品は鉄釘が43点、鉄鋌が1点出土した。鉄釘は小片が多く、頭部の形状を確認できるものは少ない。

南面築地塀 640次南区の土器類では、平安時代から室町時代までの土師器皿が主体的である。東西溝 SD11660 からは鉄滓のような金属片が付着して被熱した須恵器杯 B が出土した。瓦磚類は、奈良時代から平安時代にかけてのものが主体である。京都円勝寺 ER019 と同範とみられる平安時代後期の瓦が出土した。銅製品は板状の飾金具の一種とみられるものが1点、風鐸の破片の可能性のある板状の銅製品1点が出土した。2点とも肉眼では鍍金の痕跡は視認できない。 （垣中健志）

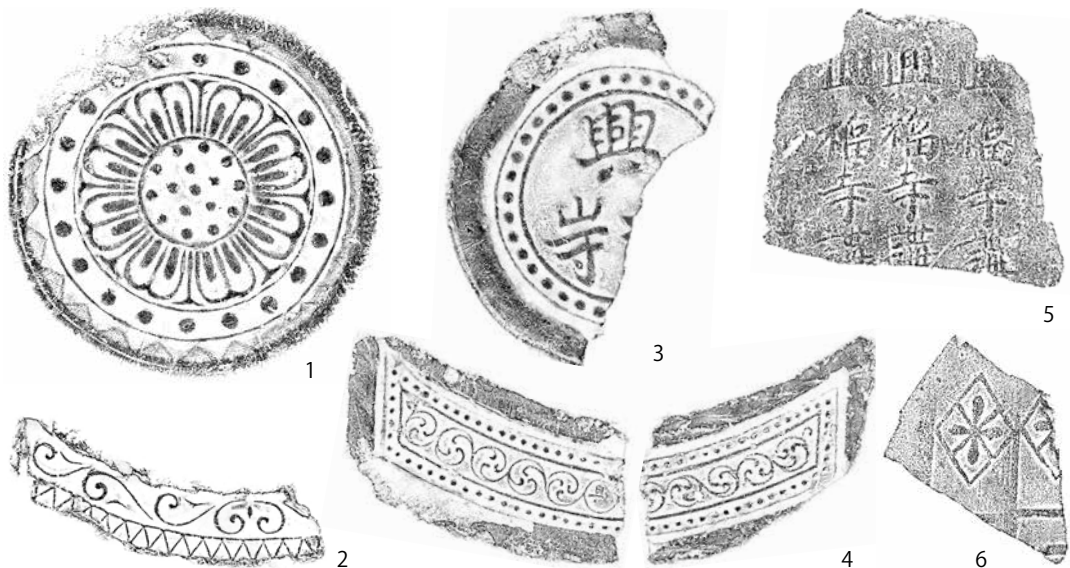
東金堂院北面回廊 649次調査では中世の土師器皿を中心に整理箱にして25箱程度の土器・陶磁器類が出土した。ここでは遺構の時期に関わる土器類について述べる。北面回廊南雨落溝 SD11760 から大乗院編年（神野恵・尾野善裕「興福寺系土師器皿の編年」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』奈良文化財研究所学報 97、2018年）II-D期（1140～1180年頃）の時期の土師器皿（第32図-1）が出土した。東金堂院内庭からはまとまって廃棄された土器が出土した。これら土師器は灯明皿の痕跡をもつものが多い特徴がある。第32図-2～16は土坑 SK11767 出土。2～5はいわゆるての字状口縁になる土師器皿。薄手のものとやや厚手になるものがある。6～10は小皿で、口縁端部が外反するものを含む（9・10）。11～14は大皿。上段のナデが外反するものが主体的であるが（12～14）、直立するよう

にナデるものもある(11)。15は高い高台を付す皿。供物用の器種であろう。16は瓦器椀。これら土器の特徴から大乗院編年のII-B期(1070~1110年頃)に位置づけられる。16~20は隣接する土坑SK11769出土。19は上段のナデが直立する大皿で、20は外面のミガキが形骸化しており、川越編年(川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎、1983年)の第II期にあたる。すなわち、土坑SK11769はII-B期(1070~1110年頃)からII-D期(1140~1180年頃)程度の時間幅を有すると見てよからう。(神野 恵)

北面回廊から出土した瓦磚類の時期は創建期から近世にまで及ぶ(第33図)。奈良時代創建期の軒丸瓦6301A(1)と軒平瓦6671A(2)のほか、奈良時代中頃の軒平瓦6682D・Gも一定程度出土した。時代別では、平安時代の軒丸瓦、軒平瓦が多く出土しているが、文様は多様で建物の建て替えや屋根の葺き替えの時期を特定できる資料はない。そのほか、鎌倉時代再建期の興福寺銘軒丸瓦(3)、軒平瓦(4)が目立つほか、鎌倉時代の平瓦凸面に「興福寺講堂」銘のタタキ(5)、菱形花文のタタキ(6)を施したものがある。(今井晃樹)



第32図 649次調査出土土器 1:4



第33図 649次調査出土軒瓦 1:4

5 結 語

(1) 鐘樓の調査成果と課題

発掘調査の結果、鐘樓 SB11010 の規模は桁行 3 間 (約 10.1m、34 尺) × 梁行 2 間 (約 6.5m、22 尺) の南北棟建物と判明した。『流記』には、鐘樓の規模について大小 2 つの記載がある。一つは経蔵 (桁行 34 尺、梁行 22 尺) と同規模とする記述で、鐘樓の柱配置にもとづく建物規模と一致する。ところが、「弘仁記」には桁行 46 尺 (13.6m)、梁行 35.3 尺 (10.4m) とあり、また「宝字記」も同様である、と記述がある。経蔵の規模より一回り大きい「弘仁記」と「宝字記」の記述が何にもとづくものかは判然とせず、課題とされてきた。しかし、今回検出した基壇上面をめぐる袴腰地覆石抜取溝 SD11400 の南北距離は 13.4 m、東西距離は 10.1 m であり、「弘仁記」と「宝字記」の数値とほぼ一致する。したがって、「弘仁記」と「宝字記」に記載された鐘樓の規模は、袴腰下端の平面規模を記していると考えられる。また、興福寺の鐘樓が袴腰を備えた時期も、奈良時代の創建期にさかのぼる可能性が高くなった。

放射性炭素年代測定によれば、下層炭層は 7～9 世紀の年代を示すことから、元慶 2 年に焼失した創建鐘樓に由来すると考えられる。基壇周囲の整地土下半は平安時代までの年代を示すため、平安時代の再建にともなって施された可能性が高い。基壇外装抜取溝 SD11401A は元慶年間以降、平安時代に大きく 3 度ある罹災のいずれかの基壇改修に対応するとみられる。

整地土上半に含まれる炭化物は平安時代後半～鎌倉時代の年代を示す。治承 (あるいは建治) 年間の焼失と再建に続き、基壇周囲に改めて整地が施されたことと対応する。そして、上層焼土中の炭化物がおおむね鎌倉時代の年代に収まる 11～12 世紀を示す。これは、嘉暦 2 年 (1327) に治承 (あるいは建治) 年間再建の鐘樓が焼失・倒壊した結果、鎌倉時代までの周辺整地土の上に焼失・倒壊した鐘樓の壁材が、上層焼土と呼ぶ堆積層として形成されたと解釈できる (『紀要 2021』)。

また、基壇西面上層焼土直下に白色の薄片が広く堆積している状況を確認した。白色の薄片を採取し、顕微鏡観察と元素分析をおこなった。観察と分析の結果、白色の薄片の主な構成要素はケイ素を多く含む非晶質の粒子である可能性が指摘された。これらは鐘樓の建築材や壁材、その仕上げ材の白色塗装である可能性が考えられる。上層焼土の炭化物の年代が平安時代後半～鎌倉時代であることから、治承 (あるいは建治) 年間の焼失後の再建鐘樓の外壁に、火山灰材料を用いた白色塗装がなされていたとみられる (森先一貴ほか「興福寺鐘樓出土白色薄片の材料分析-第 625 次」、『紀要 2022』)。

その後、調査を担当した森先一貴は、興福寺鐘樓の変遷を以下のようにまとめている (森先一貴「奈良時代の鐘樓遺構-興福寺鐘樓に関する補論-」奈良文化財研究所編『文化財論叢 V』、2023 年)。奈良時代の創建期に、丘状に基壇土を積み上げると同時に、礎石を設置する。基壇外周部を切り出し、地覆石は置かず羽目石を直接立て、基壇上面に袴腰地覆石を設置し、桁行 3 間・梁行 2 間の袴腰付鐘樓を建てた。平安時代のいずれかの罹災後、羽目石の一部を据え直す (SD11401A)。据え直す羽目石の高さは、石材に高さの規格を設けず、羽目石の底面で高さの調整をおこなった (SX11402)。あわせて基壇周囲に整地をほどこしたことで、基壇の周囲に対する比高は低下した。治承 4 年 (1180) の焼失後、養和元年 (1181) に再建されるが、この鐘樓の外壁には火山灰材料を用いた白色塗装がなされていた可能性がある。嘉暦 2 年 (1327) の焼失により、養和年間に再建された鐘樓が基壇周囲に倒壊し、炭化物を含む焼土層として堆積する。応永 5 年 (1398) の再建では、羽目石の一部を抜き取って据え直し (SD11401B)、袴腰地覆石を抜き取り (SD11400)、基壇高の確保のために基壇土を積み足し、羽目石上

面の高さを上げたと考えられる。なお、この時期の基壇外装は享保2年(1717)の焼失以降に抜き取られている(SD11401C)。

以上のように、発掘調査の成果によれば、興福寺鐘楼は奈良時代の創建当初より袴腰付鐘楼で建てられた可能性が高いことがあきらかになった。袴腰付鐘楼の現存事例には、平安時代末の建立とされる法隆寺東院鐘楼が知られていたが、確認できるなかでは国内最古の袴腰付鐘楼の事例である可能性がある。また、興福寺鐘楼は史料上、複数回罹災したことが知られていたが、損害の程度の詳細は不明であった。発掘調査の成果によって、基壇の大幅な改修をとまなうような被害は少なくとも平安時代と室町時代にあったことが判明した。また、炭化物の年代学的検討からは、平安時代、治承4年(1180)の焼き討ち、嘉暦2年(1327)の焼失、享保2年(1717)の焼失と、少なくとも4回、鐘楼は甚大な被害を受けたことがわかった。

課題として、興福寺鐘楼の基壇構造や柱配置は奈良時代の鐘楼建築において異質なものであるが、その平面規模は官大寺に次ぎ、大国の国分寺のそれを凌ぐ。さらに、袴腰付鐘楼は興福寺鐘楼特有のものであった可能性もあるが、奈良時代に袴腰付建築物の存在がすでに知られていた可能性も十分にある。こうした点について、今後の発掘調査を通じて類例が追加され、創建年代等を含めた検討が必要である。

(2) 東金堂院の調査成果と課題

西面回廊 625次北区では、五重塔の正面に開く西面南門SB11420を確認した。SB11420は、桁行3間、梁行2間の礎石建ちで、桁行は中央間が約3.2m(11尺)、脇間が約2.6m(9尺)、梁行は約2.4m(8尺)等間となる。いっぽう、『流記』には五重塔正面の門について、「西門二門。<各高一丈二尺七寸。長三間。々別一丈。>広一丈六尺」との記載がある。すなわち、門の規模は、桁行が3間で1丈(約2.9m)等間、梁行が1丈6尺(約4.7m)、と書かれている。梁行については、梁行総長は16尺となり、『流記』の記載とほぼ合致する。しかし、桁行については、3間という規模は一致するものの、柱間寸法が符合しない。遺構では中央間が広がるのに対して、『流記』では等間とする。これにともない、桁行総長も遺構と『流記』とで約1尺の相違がある。

また、SB11420の礎石据付穴・抜取穴には重複関係が認められず、1回分の痕跡しか検出できなかった。この遺構の形成年代も明確でない。したがって、創建以来礎石の位置は変わらなかったとも解釈できるが、創建期の礎石の痕跡はすべて失われ、今回検出した礎石の痕跡はいずれかの時期に改築された遺構、つまり『流記』の記載とは異なる時期の遺構と解釈することも不可能ではない。SB11420に関わる遺物はほとんど出土せず、その妥当性を判断できないことが課題である。

640次北区で検出した東金堂西正面に開く西面北門SB11600は、礎石の据付穴・抜取穴から、桁行3間、梁行2間の八脚門とみられる。桁行総長は約8.6m(29尺)、梁行総長は約4.7m(16尺)で、柱間寸法は桁行の中央間が約3.3m(11尺)、両脇間が約2.7m(9尺)で、梁行が約2.4m(8尺)の等間である。『流記』に記される規模と比較すると、梁行方向は整合するが、桁行方向はわずかに整合しない。建物規模は南門SB11420と同じである。基壇規模は、南北約10.8m(36.5尺)、東西約8.0m(27尺)を測る。また、西面北門SB11600の基壇外装と雨落溝について、それぞれ2時期の変遷を確認した。基壇外装と雨落溝は、いずれも下層の位置と規模をほぼ踏襲して上層が構築されていた。

以上のように、西面南門SB11420と西面北門SB11600の桁行方向が『流記』と一致しないことが

大きな課題としてあげられる。繰り返される焼失と再建の中で、造営単位の違いや施工水準による誤差、造営計画の変更などの影響が考えられるとともに、『流記』の記載やその他の関連する史料、絵画資料についてもさらなる検討が必要である。

625次北区では、西面回廊の基壇の削平が著しく、基壇外装を一部検出したのみにとどまり、西面回廊の規模と構造をあきらかにすることはできなかった。625次南区では西面南回廊 SC11440 の礎石据付穴を確認した。SC11440 は礎石建ちの単廊で桁行・梁行ともに約 3.0 m (10 尺) である。

640次北区では、東金堂の西正面に開く西面北門 SB11600 の北と南に取り付く西面北回廊 SC11570・西面中回廊 SC11610 を確認した。西面北回廊 SC11570 は、礎石の据付穴・抜取穴から、梁行1間の単廊とみられる。梁行の柱間寸法は約 3.5 m (12 尺) である。桁行は2間分を検出し、柱間寸法は北側が約 3.1 m (10.5 尺)、南側が約 2.4 m (8 尺) で、SB11600 との取り付けの距離は約 1.5 m (5 尺) である。SC11570 の棟通りは、SB11600 や西面南門 SB11420 とほぼ揃うものの、西面南回廊 SC11440 と SC11570 の梁行寸法や棟通りは一致しない。基壇規模は、東西約 6.2 m (21 尺) を測る。基壇外装には、いずれも流紋岩質凝灰岩の切石が用いられていた。

西面中回廊 SC11610 は、基壇外装抜取溝 SD11589 や西雨落溝 SD11597A・B を検出したのみで、柱配置や基壇規模などは明確でない。しかし、これら検出遺構の位置からみて、基壇・建物ともに SC11570 と同形式と考えられる。

西面南回廊 SC11440 の東側柱筋は、北区で検出した西面南門 SB11420 の東側柱筋とほぼ一致する。そのため、南区で検出した SC11440 をそのまま北へ延長して SB11420 に接続させると、SB11420 は門の西側のみが回廊から突出する、あまり類例のない構造となる。西面南回廊 SC11440 の棟通りが西面南門 SB11420 と揃わず、西面北回廊 SC11570 の梁行寸法と棟通りとも一致しないことや、SC11440 の柱位置と柱間寸法は大岡實による復元案（『南都七大寺の研究』前掲）が想定したものとも異なっていることから、復元に向けて西面回廊の規模と構造のさらなる検討が必要である。

西面北門 SB11600 と西面北回廊 SC11570・西面中回廊 SC11610 の基壇外装と雨落溝について、それぞれ2時期の変遷を確認した。基壇外装と雨落溝は、いずれも下層の位置と規模をほぼ踏襲して上層が構築されていた。下層は、検出状況から奈良時代創建期に遡る可能性がある。

SC11570 の西辺の地覆石抜取溝 SD11588 の下では、焼土を含む整地土を検出した。ここに堆積していた遺物集積 SU11590 の土師器皿・軒丸瓦の年代、放射性炭素年代測定の結果（『紀要 2022』）、東金堂と五重塔の被災歴からみて、この焼土は治承4年(1180)の南都焼討にともなうものと判断できる。興福寺境内の発掘調査で、南都焼討に関わる遺構を特定したのは初めてである。鎌倉時代初頭以降の再建では、奈良時代創建当初の位置や規模をほぼ踏襲して復興したことがあきらかとなった。これは、これまでの興福寺境内の各所の調査所見と整合する。SC11610 の上層西雨落溝 SD11597B から出土した遺物のうち、平安時代末～鎌倉時代初頭の鬼瓦は、南都焼討後の SB11600 もしくは SC11610 の再建にともなう可能性がある。『三長記』元久3年(1206)2月22日条によれば、このときの除目で「左兵衛尉資時」が任じられたのは「興福寺御塔廻廊功」のためとあるので、回廊はこのときまでに五重塔とともに竣工したと考えられる。また、SD11597B の埋土から出土した土師器皿・瓦器は、鎌倉時代～室町時代前半のものであり、東金堂・五重塔が焼失した文和5年(1356)と重なる。

以上から、SB11600 および SC11570・SC11610 は、南都焼討後の元久3年(1206)頃に再建されたものの、文和5年(1356)の東金堂・五重塔の焼失と同時期に廃絶したと考えられる。また、放射

性炭素年代測定の結果（『紀要 2022』）を踏まえれば、11 世紀後半の東金堂・五重塔の再建にあわせて、SB11600 および SC11570・SC11610 も再建された可能性がある。

北面回廊 649 次調査区では、東金堂院北面回廊 SC11730 を検出した。北面回廊は梁行 1 間の単廊で、桁行 7 間分を検出した。回廊の規模は桁行約 3.3 m（11 尺）の等間、梁行約 3.6 m（12 尺）であった。梁行寸法は西面回廊 SC11570 と一致する。柱が円柱で直径が約 36cm（1.2 尺）であることがわかった。基壇の規模は、幅約 6.6 m（22 尺）、残存する基壇の高さは北辺が 50cm、南辺が 10cm 程度。軒の出は、南が約 1.4m、北は雨落溝の南の上端までの距離が約 1.6 m であることから、それ以上と考えられる。基壇北辺は乱石積の外装であった。また、東金堂院の内庭から、基壇を横断する暗渠を通じて、回廊の北へ排水していた様子を確認した。

また、基壇土上面や基壇積み足し土上面で礎石の据付穴・抜取穴の重複がなく、それぞれの上面で他の場所で据付穴・抜取穴を確認できなかったことや、据付穴の埋土に奈良時代から鎌倉時代にかけての土器や瓦を含むことなどから、礎石が創建当初とほぼ同じ位置で据え直されたとみられ、創建当初の位置と規模を踏襲して回廊が再建されたことがあきらかになった。これは、これまでの興福寺境内の調査成果とも整合する。また、今回検出した乱石積基壇 SX11750 は、構築石材の加工の有無、種類や大きさが多様なことから、奈良時代の創建当初の位置を踏襲した、平安時代以降の再建にともなうものであると考えられる。

649 次調査であきらかになった回廊の構造と規模は、既往の調査（『防災報告』）で判明している北面回廊の規模とほぼ整合する。東金堂院北面回廊が大岡實による復元案（『南都七大寺の研究』前掲）よりも東へ延びることで、東金堂院は従来の想定よりも東西 100 m 以上の東西に長い規模となることが確定した。また、北面回廊は今回の調査区よりもさらに東へ続くこともあきらかになった。

課題として、北面回廊の東限や、『流記』の記載にみえる北面回廊にある「小門」の位置をあきらかにすることができなかった。東金堂院北面回廊の正確な規模の復元については今後の課題となる。また、東金堂院には、『流記』や興福寺を描いた絵画資料によると、院内には東金堂と五重塔の他にも建物があったことがわかる。東金堂院の規模が従来の復元案よりも大きくなることによって、東金堂院の内部構造を回廊や門の位置とあわせて再検討するとともに、東金堂院内部の建物の規模と構造、その変遷について追究することが課題である。

南面築地塀 625 次南区と 640 次南区では、一連の南面築地塀 SA11450 を確認した。640 次南区からさらに東に延びている。625 次南区では、SA11450 とともに検出した礎石 SS11445 や柱穴列 SX11442、東西石組溝 SD11446 等の性格については課題を多く残した。SS11445 は SA11450 に開く門の礎石である可能性や SA11450 の寄柱の可能性等が考えられるが、断案を示せない。SD11446 は平安時代に構築された排水路とみているが、創建期の SA11450 の北雨落溝で平安時代に一部改修されたとみることも不可能ではない。

築地塀本体の南辺は調査区外に位置するため、築地塀の規模などはあきらかにできなかったが、現在の興福寺南面の石垣を築地塀の基部南縁と仮定すると、基底幅約 2.1 m、犬走り幅約 90cm の築地塀が復元できる。また、640 次南区では、中世以降の築地塀の改修にともなう柱穴や東西溝、礎石などの遺構も確認した。柱穴列は少なくとも 2 条あり、時期差も認められた。南面築地塀 SA11450 は中世以降、創建期の築地塀の基底幅を縮小した小規模な築地塀に造り替えられた後、改修を重ね、明治時代に撤去されたと考えられる。

（垣中）

報告書抄録

ふりがな	こうふくじ だいいっきけいだいせいびじぎょうにともなうはくつちようさがいほう きゅう							
書名	興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報IX							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	垣中健志・今井晃樹・神野 恵							
編集機関	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町 2-9-1 Tel 0742-30-6837							
発行者	興福寺							
所在地	〒630-8213 奈良県奈良市登大路町 48 番地 Tel 0742-22-7755							
発行年月	西暦 2024年 3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃〃	〃〃		m ²	
こうふくじ 興福寺	ならけんならし 奈良県奈良市 のぼりおおじちよう 登大路町	29201	—	34度 40分 58秒 ほか	135度 49分 55秒 ほか	2020.7.1～ 2020.10.15 2021.7.13～ 2021.11.4 2022.7.6～ 2022.11.17	1121	境内整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
興福寺	寺院	奈良時代) 昭和時代	鐘楼 東金堂院回廊 東金堂院回廊門	瓦 土器 金属製品		<ul style="list-style-type: none"> ・鐘楼の規模・構造と罹災の履歴が詳細にあきらかになった。 ・東金堂院の西面回廊、北面回廊の規模・構造と、東金堂と五重塔の西正面に設けられた門の規模・構造と罹災の履歴が詳細にあきらかになった。 ・東金堂院北面回廊が従来の復元案より東に延長することが確定した。 		



2024年3月8日 印刷

2024年3月18日 発行

興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報IX

編集 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

発行 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48番地

印刷 能登印刷株式会社
